付篇Ⅰ

吉田構内教育学部附属養護学校新営に伴う発掘調査

1　調査の経過

教育学部附属養護学校敷地は昭和54年3月、吉田構内の西端部(山口市大字吉田3003番地）に求められた。同敷地の南西部に隣接する水田ではそれまでに土師器、瓦質土器などが表面採集されており、新営予定地にも埋蔵文化財が埋存している可能性があった。用地取得にあたっては山口市企画部企画財政課の斡旋も行われたことから、用地内の埋蔵文化財の有無および分布範囲の把握のための試掘調査は山口市教育委員会で実施することとなった。

試掘調査は昭和54年4月10日から12日にかけて、新営予定地内に存在する17筆の水田について、1 m×1 mおよび1 m×2 mの試掘壙を110ヶ所設定して行われた。調査の結果、新営予定地の中央部では顕著な埋蔵文化財は確認できなかったが、敷地の東部(A地区)・北西部（B地区）・南東部（C地区）の3地区で遺構および遺物包含層が検出された。遺構は、B地区で弥生時代から古墳時代の溝2条と平安時代以降の柱穴が検出され、新営予定地の北西縁に位置する水田6筆に分布範囲をもつことが判明した。遺物包含層は、A・C両地区で検出され、A地区では弥生時代および平安時代、C地区では弥生～平安時代の遺物が出土した。

試掘調査の結果を受けて、校舎の新営は埋蔵文化財の認められなかった予定地中央部を中心に計画されることとなった。しかし、B地区に計画が予定されていた体育館および北西縁の排水溝、擁護壁は設計の都合上変更が困難なため、山口市教育委員会は再度、8ヶ所の試掘壙を設定して試掘調査を実施し、その後の取り扱いについて関係機関と協議することとした。

調査の結果、体育館新営予定地では顕著な遺構・遺物は発見されず、建物建設については差し支えないものと判断された。しかし、排水溝、擁護壁の計画地域では、北端部を除いた地域で遺構の埋積土と思われる堆積層から弥生土器が出土し、この部分については工事前に事前に発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は、山口大学人文学部考古学研究室、山口県教育委員会の協力を得て、山口市教育委員会、山口大学埋蔵文化財資料館が実施した。調査期間は昭和54年11月26日から12月13日までで、調査面積は約410 m²である。

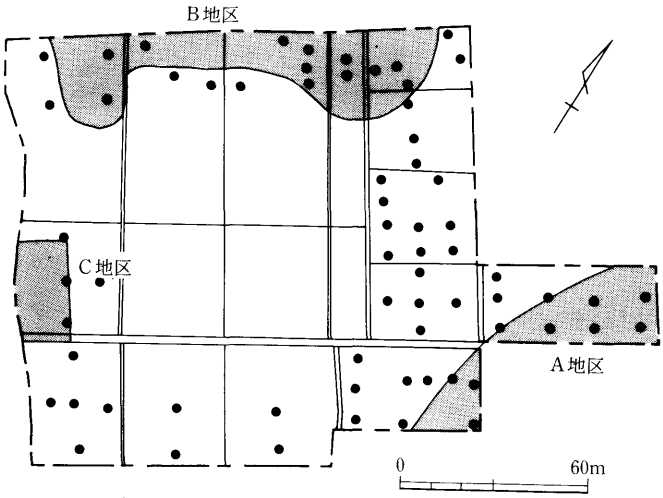


Fig. 50　第1次試掘調査地点位置図

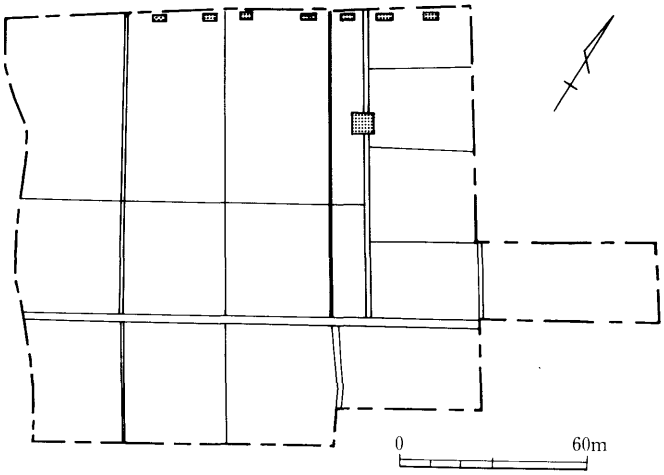


Fig. 51　第2次試掘調査地点位置図

2　層位

堆積層順は極めて単純で、層厚約15～20 cmの水田耕作土、層厚約5 cmの床土の下位が土壙・溝の検出面である橙褐色粘土の地山である。遺物包含層は堆積していない。

3　遺構

検出した遺構には、縄文時代晩期の土壙2基、弥生時代中～後期の溝7条、近世の溝8条・埋甕遺構1基がある。

溝

第1号溝　(Fig. 53・54，PL. 29(1)～(3))

調査区の東半部で検出した。東半部では蛇行しながら南西から北東に走行する溝で、第2・3号溝を切っている。検出長は約55mで、溝幅は最大約170 cm、最小約70 cmで、平均約130～140 cmの規模をもつ。検出面からの深さは約30～50 cmで、東に向かうにつれて深くなる。断面形は逆台形を呈する。埋積土は自然堆積で、上層：黒褐色粘質土、中層：淡茶褐色粘質土、下層：灰色砂質土に分層される。第1層を中心に各層とも主に前期と後期の弥生土器を包含するが、主体は弥生時代後期後半である。

第2号溝（Fig. 53・54，PL. 29(4))

調査区の東半部で検出した溝で、第1号溝に切られ、第3号溝を切っている。第1号溝

とその大半が重複し、蛇行しながら南西から北東に走行する。検出長は約51mで、溝幅は最大約230cm、最小約110cmで、平均約150～160cmの規模をもつ。検出面からの深さは約50～60cmで、東に向かうにつれて深くなる。断面形はU字形に近い。埋積土は自然堆積で、基本的には5層に分層される。東側では第1層：暗灰褐色粘質土、第2層：灰褐色粘質土、第3層：淡灰色砂質土が堆積するが、西側ではその下位に第4層：灰色粘質土、第5層：淡灰色粗砂が部分的に存在する。遺物は第1～3層に弥生土器が包含されるが、第4・5層は無遺物層である。前期～後期の土器を包含し、主体は後期後半であるが切り合い関係などから、第1号溝よりやや古い時期のものである。

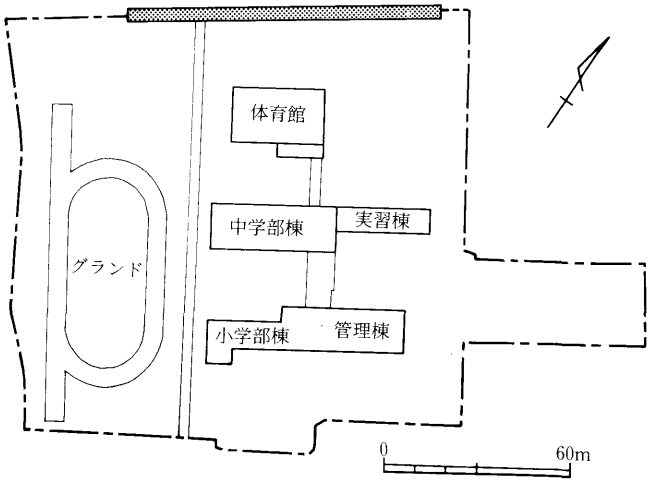


Fig. 52　調査区位置図

第3号溝（Fig. 53・54，PL. 28(1)）

調査区の中央部よりやや東を北東から南西に走行する小規模な溝で、東部では東に弯曲する。第2号溝および第7号溝に切られている。規模・流路方向から第5号溝と一連のものと考えられたが、埋積土が異なることから別個の溝として取り扱うことにした。検出長は約22mで、溝幅はほぼ一定しており、上面で約60～70cm、溝底で約30～40cmの規模をもつ。検出面からの深さは約15～20cmで、西に向かうにつれて深くなる。断面形は逆台形を呈し、埋積土は黒褐色粘質土の単一土である。遺物は前期～後期の弥生土器が若干出土したが、主体となる遺物がほとんどない。切り合い関係から弥生時代中期後半～後期初頭のものであろう。

第4号溝（Fig. 53・54，PL. 28(1)）

調査区の西端部を南西から北東に走行する。検出長は約5.5mで、溝幅は上面で約90～130cm、溝底は上面に比べて狭く約15～20cmの規模をもつ。検出面からの深さは約25～35cmで、北に向かうにつれて深くなる。東辺および西辺の北側の壁面は溝底まで二段にわたって落ち込み、階段状の狭い平坦面をもつ。断面形は逆台形に近い。壁面の西辺5ヶ所、東辺4ヶ所に径約5cmの杭状の痕跡がみられる。埋積土は6層に分層されるが、出土遺物は

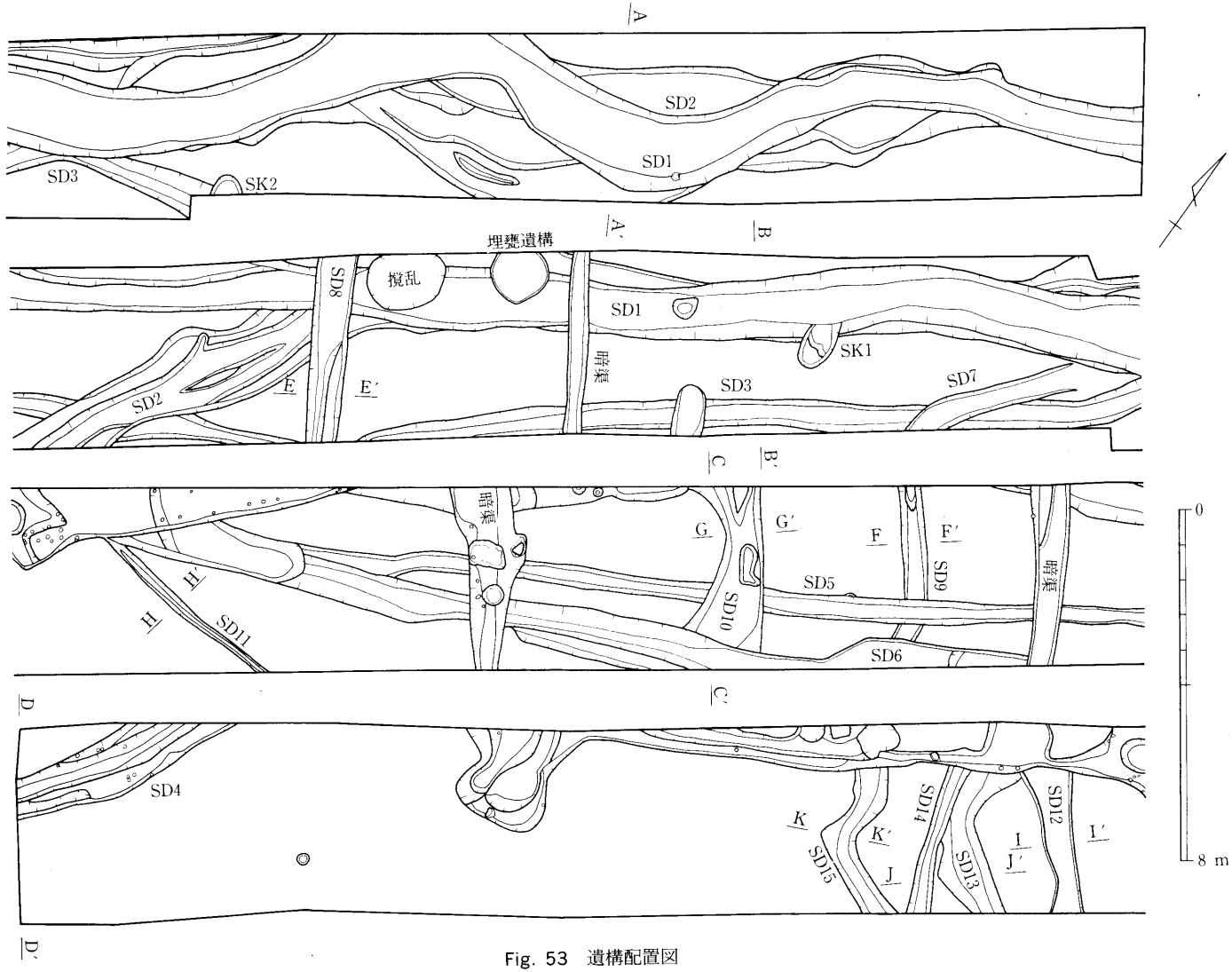

A
A′
B
B′
C
C′
D
D′
SD1
SD2
SD3
SD4
SD5
SD6
SD7
SD8
SD9
SD10
SD11
SD12
SD13
SD14
SD15
SK1
SK2
埋甕遺構
攪乱
暗渠
E
E′
F
F′
G
G′
H
H′
I
I′
J
J′
K
K′
0
8 m

Fig. 53　遺構配置図

弥生土器の小片ばかりで詳しい時期はわからない。

第5号溝（Fig. 53・54，PL. 28(1)）

調査区の中央部を北東から南西に直線的に走行する小規模な溝で、第2号溝および近世の溝に切られている。検出長は約26mで、溝幅はほぼ一定しており、上面で約40～50cm、溝底で約20～25cmの規模をもつ。検出面からの深さは約10～15cmで、西に向かうにつれて深くなる。断面形は逆台形に近く、埋積土は小礫混じりの暗茶褐色粘質土の単一土である。出土遺物には弥生土器が若干あるが、小片ばかりで詳しい時期はわからない。

第6号溝（Fig. 53・54，PL. 28(1)）

調査区の中央部を東から西に直線的に走行する小規模な溝で、第5号溝の南側を平走するが、西端部では第5号溝によって切られている。検出長は約17mで、溝幅は最大約110cm、最小約35cmの規模をもつ。検出面からの深さは約10～25cmで、西に向かうにつれて深くなる。断面形は逆台形に近い。埋積土は上層の淡茶褐色粘質土、下層の淡灰色砂の2層に分層され、弥生土器が若干出土したが、小片ばかりで詳しい時期はわからない。

第7号溝（Fig. 53，PL. 28(1)）

調査区の中央部からやや東を南西から北東に走行する溝で、第3号溝を切っている。北への延長部分は後世の削平によって消失している。検出長は約4 mで、溝幅はほぼ一定しており、上面で約60～70cm、溝底で約30～40cmの規模をもつ。検出面からの深さは約5cmを残すにすぎない。断面形は逆台形に近い。埋積土は暗茶褐色粘質土の単一土で、弥生土器若干が出土した。弥生時代後期初頭。

第8号溝（Fig. 53・54，PL. 28(1)）

調査区の中央部を南東から北西に走行する溝である。検出長は約4 mで、上面の溝幅は約75～85cmとほぼ一定しているが、溝底は南半部が狭く約15cm、北半部で60～75cmの規模をもつ。検出面からの深さは約15cmで、東辺の南側の壁面は溝底まで二段にわたって落ち込み、階段状の狭い平坦面をもつ。埋積土は淡褐色砂質土の単一土で、陶器の小片が若干出土した。近世。

第9号溝（Fig. 53・54，PL. 28(1)）

調査区の中央部、第8号溝の西約12mに位置し、南東から北西に走行する溝である。検出長は約3.5mで、溝幅はほぼ一定しており、上面で約50cm、溝底で約20～25cmの規模をもつ。検出面からの深さは約5～10cmを残すにすぎない。埋積土は暗茶褐色土の単一土で、陶器、磁器の小片が若干出土した。近世。

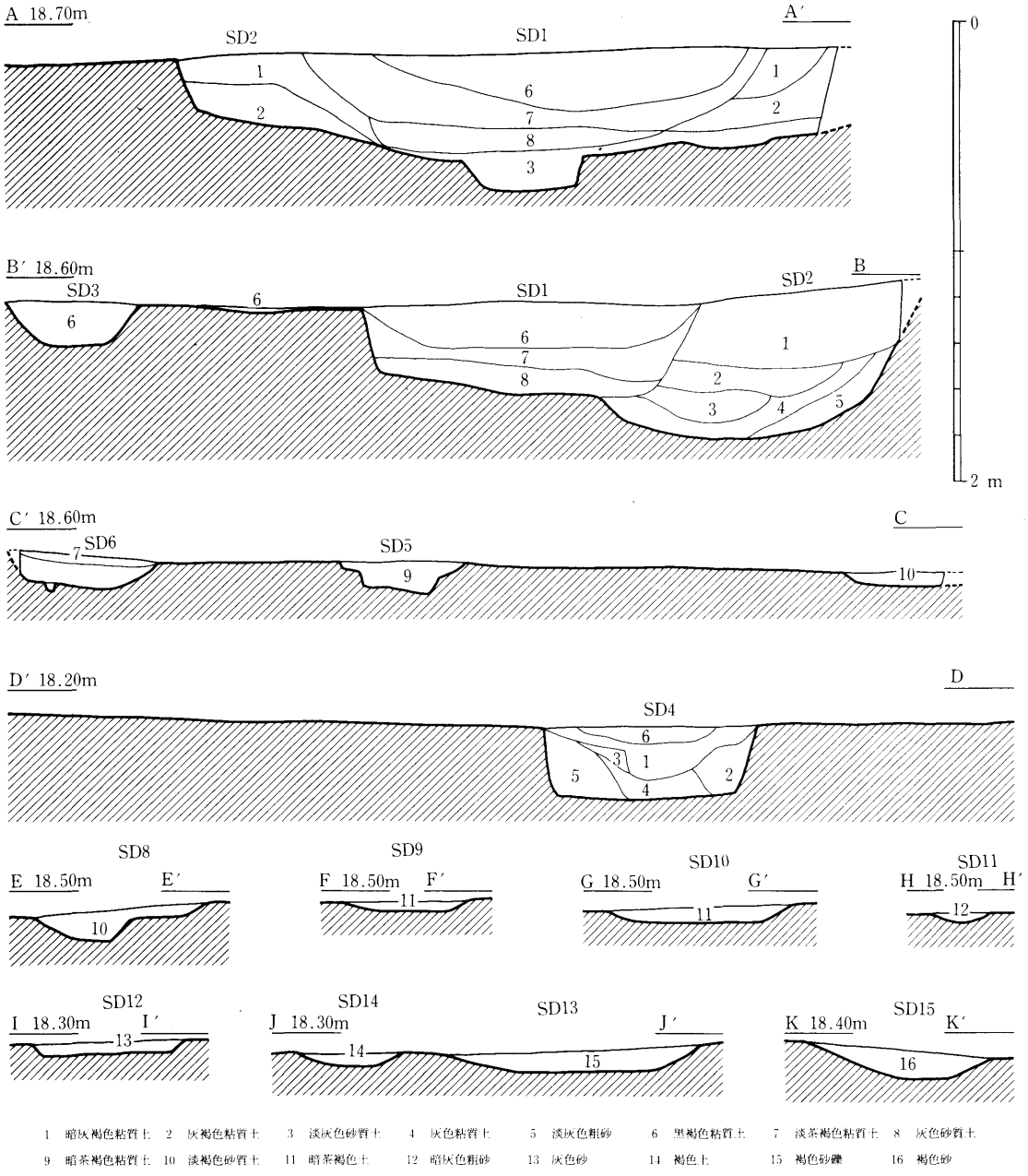


Fig. 54 溝断面実測図

第10号溝（Fig. 53・54，PL. 28(1)）

調査区の中央部、第9号溝の西約3 mに位置し、南東から北西に走行する溝である。西に弯曲し、北端部では2条に分流する。中央部の溝底には不整形な落ち込みが存在する。検出長は約4 mで、溝幅は、最大で約180 cm、最小で80 cm、溝底で約50～105 cmの規模をもつ。検出面からの深さは約5～10 cmを残すにすぎない。埋積土は暗茶褐色土の単一土で、陶器、磁器の小片が若干出土した。近世。

第11号溝（Fig. 53・54，PL. 28(1)）

調査区の東半部、第10号溝の西約10mに位置し、東から西に直線的に走行する小規模な溝である。検出長は約4.5mで、溝幅は、上面で約15～25 cm、溝底で約10 cmの規模をもつ。検出面からの深さは約5 cmを残すにすぎない。埋積土は暗灰色粗砂の単一土で、陶器、磁器の小片が若干出土した。近世。

第12号溝（Fig. 53・54，PL. 28(1)）

調査区の東半部、第11号溝の西約3.5mに位置する。南東から北西に走行する溝で、第13号溝を切っている。検出長は約3 mで、溝幅は、上面で約50～110 cm、溝底で約40～100 cmの規模をもつ。検出面からの深さは約5 cmを残すにすぎない。埋積土は灰色砂の単一土で、陶器、磁器の小片が若干出土した。近世。

第13号溝（Fig. 53・54，PL. 28(1)）

第12号溝のすぐ西に位置し、南東から北西に走行する溝で、第14号溝に切られている。検出長は約3.5mで、溝幅は、上面で約70～110 cm、溝底で約30～60 cmの規模をもつ。検出面からの深さは約10 cmを残すにすぎない。埋積土は褐色砂礫の単一土で、陶器、磁器の小片が若干出土した。近世。

第14号溝（Fig. 53・54，PL. 28(1)）

南から北に直線的に走行する溝で、第13号溝を切っている。検出長は約3.5mで、溝幅はほぼ一定しており、上面で約30～40 cm、溝底で約20 cmの規模をもつ。検出面からの深さは約5 cmを残すにすぎない。埋積土は褐色土の単一土で、陶器、磁器の小片が若干出土した。近世。

第15号溝（Fig. 53・54，PL. 28(1)）

第14号溝のすぐ西に位置し、南東から北西に蛇行しながらに走行する溝である。検出長は約4 mで、溝幅はほぼ一定しており、上面で約50～60 cm、溝底で約25～35 cmの規模をもつ。検出面からの深さは約5 cmを残すにすぎない。埋積土は褐色砂の単一土で、陶器、

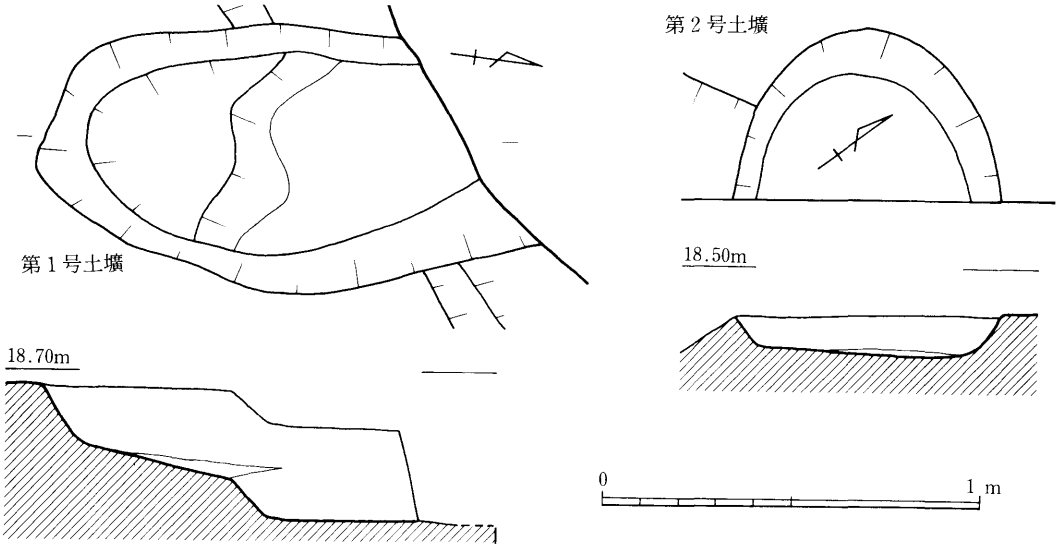


Fig. 55　土壙実測図

磁器の小片が若干出土した。近世。

土壙

第1号土壙（Fig. 55，PL. 28(2)）

調査区の中央部よりやや東に位置し、第1号溝によって切られている。平面形態は楕円形で、長軸112 cm、短軸72 cmの規模をもつ。壙底は階段状に北から南へ下降しており、検出面からの深さは約5 cmを残すにすぎない。埋積土は第2号土壙と同じ淡褐色粘質土の単一土で、使用痕のある剝片が出土した。縄文時代晩期。

第2号土壙（Fig. 55，PL. 28(3)）

調査区の東半部、第1号土壙の東約12m に位置し、第3号溝によって切られている。平面形態は円形系統で、残存部分の最大径は70 cm、検出面からの深さは約10 cmを残すにすぎない。埋積土は淡褐色粘質土の単一土で、縄文土器の浅鉢、甕もしくは深鉢が出土した。縄文時代晩期後半。

4　出土遺物

土器

第1号溝出土遺物（Fig. 56～59，PL. 30～32・37・38）

縄文土器および弥生時代前期のものも含まれるが、大半は弥生時代後期後半である。

第1層出土遺物（1～28）

1～3は壺。1・2は複合口縁をもつもの。1は拡張部が短く内傾しながら立ち上がり、

口縁端部は外反する。2は直立する拡張部の外面にヘラによる山形文を施文し、内部を斜格子で埋める。3はしまりのない頸部から口縁部が外弯ぎみに直立する。

4～21は甕。「く」の字に外反する口縁部をもち、後期のものが多い。口縁部は総じて長く、頸部内面に稜をもつもの（8・15）や頸部からゆるやかに外反するもの（7・20）などがある。口縁端部が面取り風に平坦な面をもち、尖りぎみに終わるもの（6・9・11）もある。内面は刷毛目仕上げのもの（7・21）があり、口縁部内面もしくは外面に刷毛目を残すもの（5・7・9～11・14）もある。4は端部全面にヘラによる刻目を施し、しまりのない頸部の下位には、ヘラによる少なくとも2条の沈線が巡る。5は口縁部が内弯ぎみに立ち上がり、端部は凹線状に窪む。14は口縁部が直立ぎみに立ち上がり、端部は丸く終わる。底部は底径の小さい平底が大半で、外面の刷毛目が底部端までおよぶもの（18）もある。

22～27は高坏。22・23は坏部で、上半部は短く屈曲する。脚部は長脚で、裾部まで直線的に移行するもの（24）や裾部が内弯ぎみに広がり、端部がわずかに内側に屈曲するもの（27）などがある。透し穴は焼成前に三方に穿孔されている。外面にヘラミガキされるもの（24）もある。

28は大形の甕の蓋であろう。

第2層出土遺物（29～49）

29～33は壺。29～32は前期のもので、29は肩部に削り出しによる段をもつ。肩部には貝殻による羽状文を施文する（30～32）。33は複合口縁をもつ後期のもので、拡張部が内傾し、口縁端部は短く外方に屈曲する。内外面はヘラミガキされる。

34～41・43～45は後期の甕。口縁部は「く」の字に外反し、外弯ぎみに開くもの（35・37・38）、直線的に開くもの（36）、内弯ぎみに開くもの（39）などがある。口縁端部が短く直立する複合口縁の甕（34）もある。35は頸部が強い横ナデにより段をもつ。内外面とも刷毛目仕上げが多く、口縁部内面をナデるもの（39）もある。38は内面の調整に細粗二種類の刷毛を用いる。40～45は底部で、安定した平底のもの（44）、不安定な平底のもの（40・41・43）、丸底のもの（45）などがある。内面はナデるもの（41・43）とヘラナデのもの（40・44・45）がある。42は縄文土器で、内面は板状工具による擦過が行われる。

46～48は高坏。46はやや深い坏部で、上半部は外弯して短く開く。47・48は脚裾部で、裾部まで直線的に開く。48は外面に右もしくは左上がりのタタキが施される。

49は大形の鉢で、口径に比べて器高が低く、埦に近い。胴部から口縁部まで内弯して立

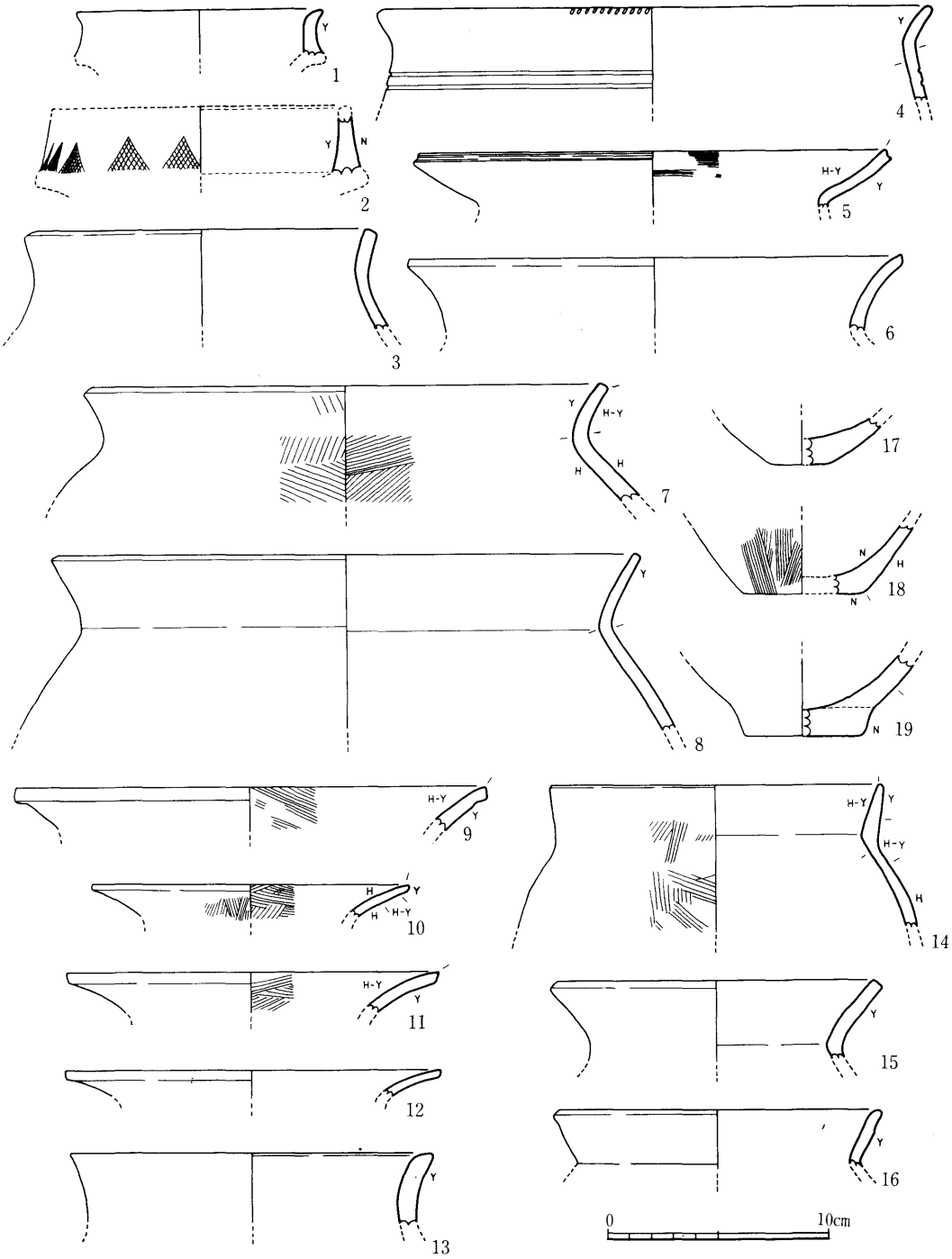


Fig. 56　第１号溝出土遺物実測図(1)

第１号溝出土遺物

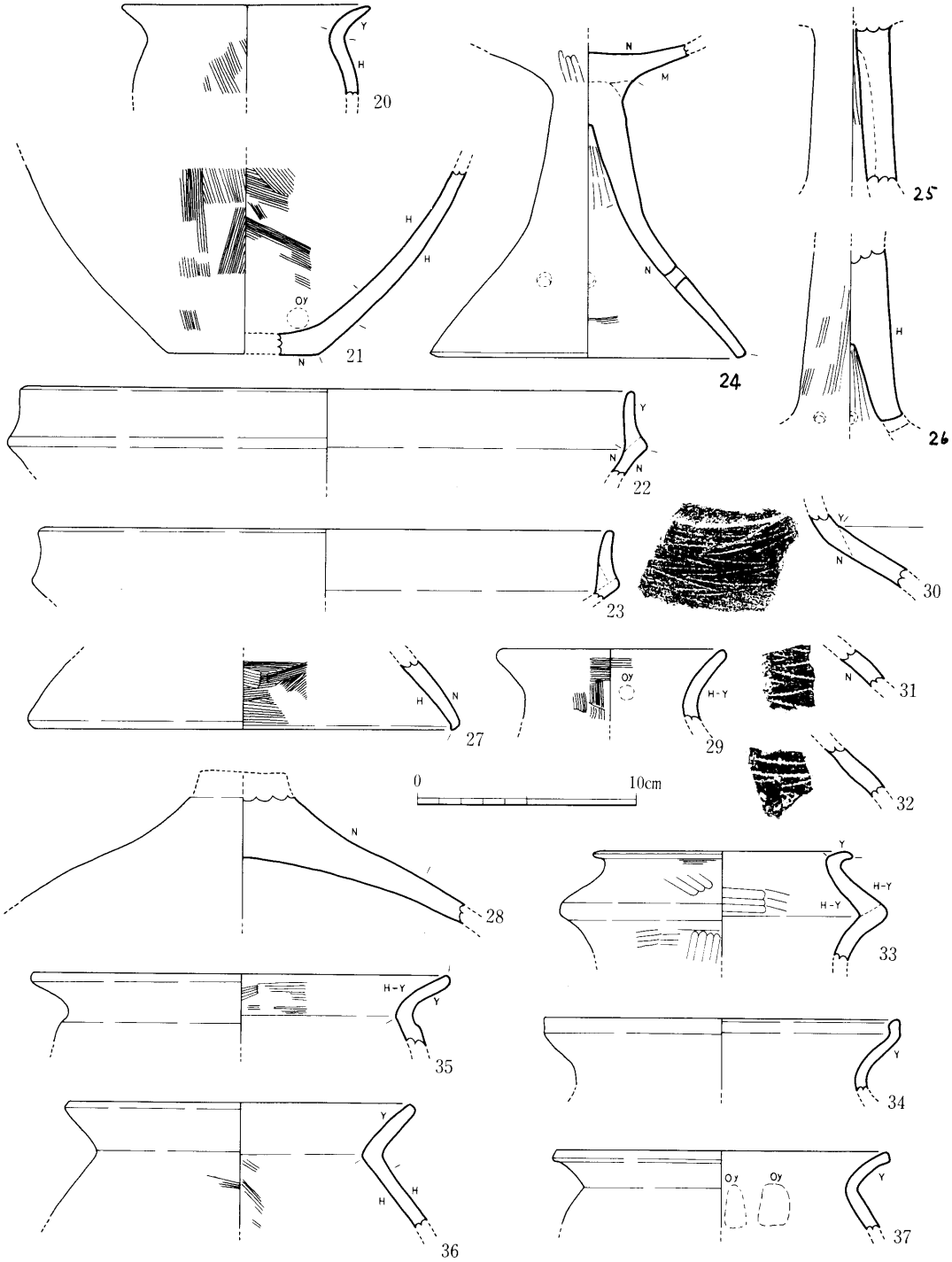


Fig. 57　第１号溝出土遺物実測図(2)

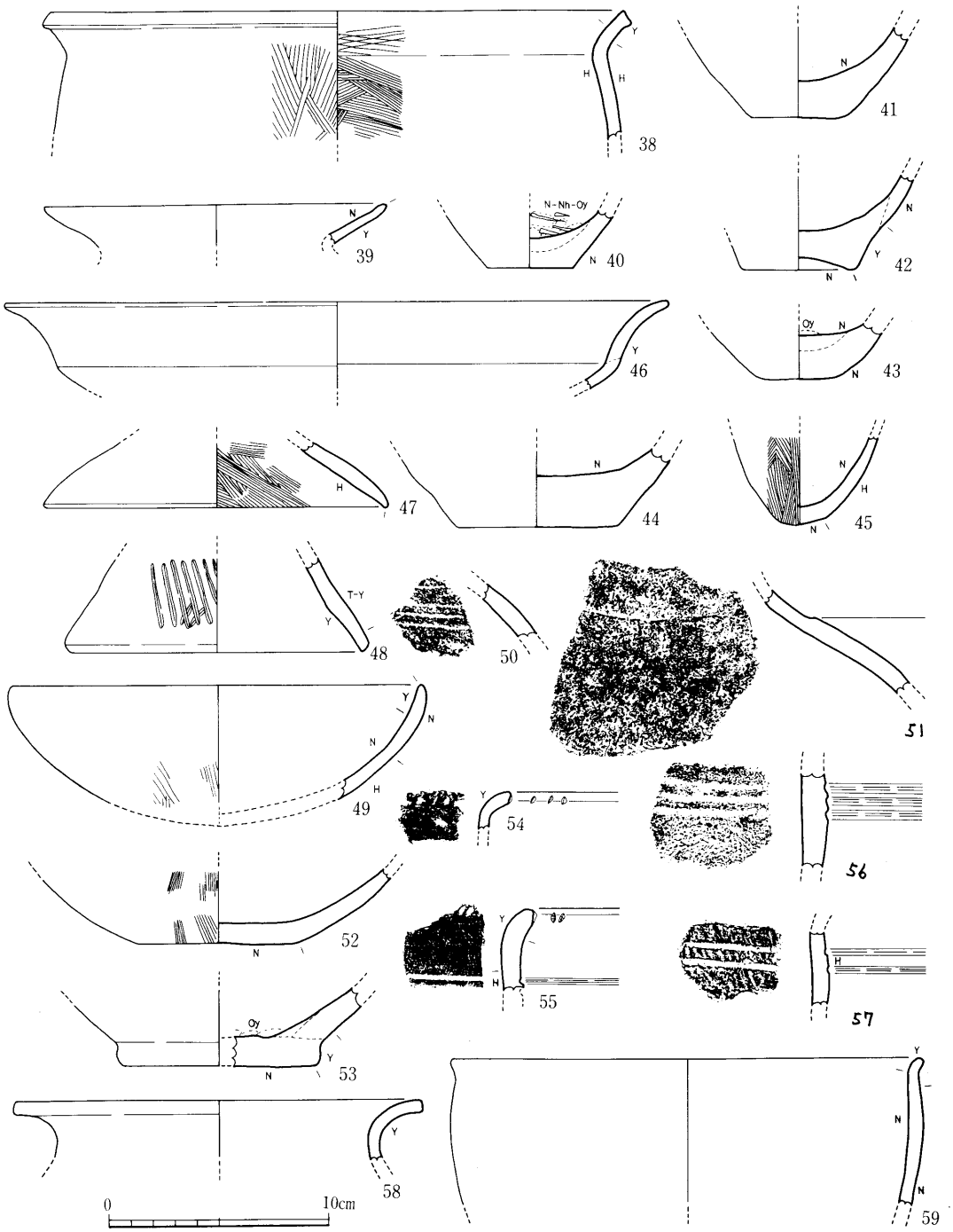


Fig. 58　第1号溝出土遺物実測図(3)

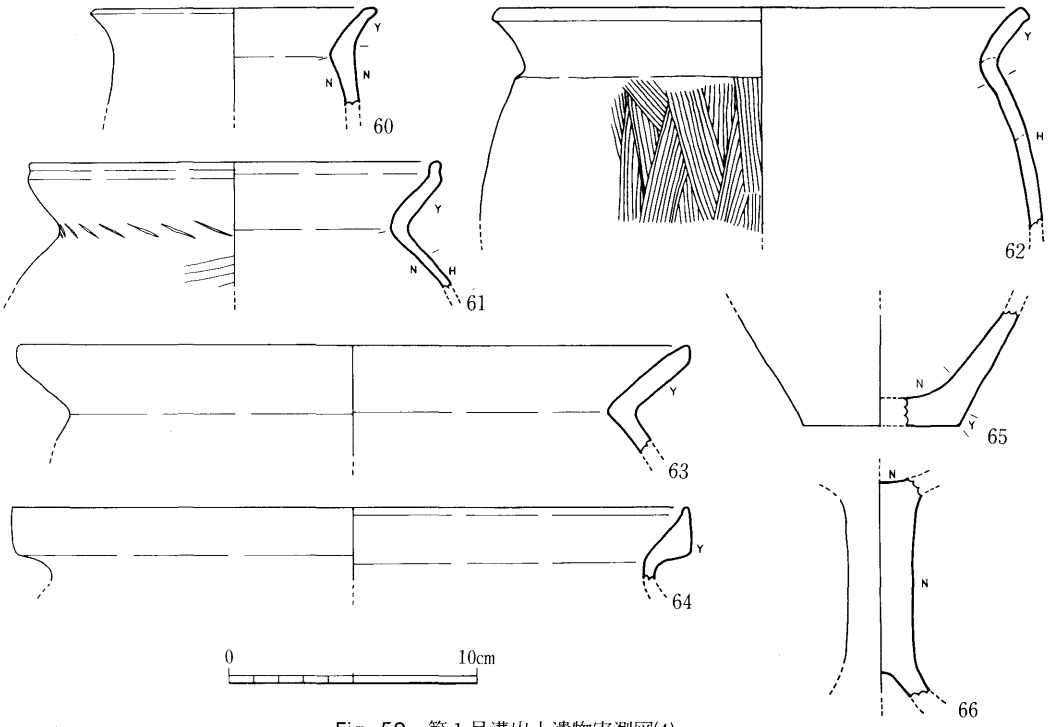


Fig. 59　第 1 号溝出土遺物実測図(4)

ち上がり、端部は尖りぎみに終わる。胴部外面下半は刷毛目仕上げ、他はナデられる。

第 3 層出土遺物（50～66）

50～53 は壺。50 はヘラによる少なくとも 4 条の沈線が巡る。51 は肩部に削り出しによる段をもつ。施文は認められない。52･53 は平底の底部。53 は円盤状の安定した底部で、内面には指圧による調整痕が認められる。

54～65 は甕。54･55 は如意形に短く外反する口縁部をもつ。54 は口縁端部下端にヘラによる粗雑な刻目を施す。55 は口縁部がゆるやかに開き、端部下端には刷毛原体による刻目を施す。胴部外面には少なくとも 2 条のヘラ描き沈線が巡り、内面は縦刷毛目仕上げされる。56 は 3 条、57 は 2 条のヘラ描き沈線が巡る。58 は大きく外弯して開く口縁部をもつ。59 は張りのほとんどない胴部をもち、口縁部は短くわずかに外反する。「く」の字に外反する口縁部をもつもののなかには、口縁部の開きが弱く、端部に平坦な面をもつもの（60）や口縁端部が短く直立する複合口縁の甕(61)、口縁部が直立ぎみに肥厚して断面三角形を呈するもの（64）などがある。61 は頸部外面にヘラによる刺突文が巡る。65 は平底の底部。66 は長脚の高坏の脚柱部。

第2号溝出土遺物（Fig. 60～64，PL. 33～39）

縄文土器および前期～後期の弥生土器があるが、主体は弥生時代後期後半である。

第1層出土遺物（67～97）

67～71は壺。68は肩部に削り出しによる低い段をもち、貝殻による2条の沈線の下位に羽状文を施文する。69は貝殻による2条の沈線間に無軸羽状文を施文する。67・70は複合口縁をもつ。67は屈曲部より内側に、内傾して直線的に立ち上がる拡張部をもつ。拡張部への施文はないが、屈曲部の下位に5条単位の櫛描き波状文が巡る。粗い刷毛目仕上げがなされるが、拡張部の外面下半は丁寧なヘラミガキが行われる。70は拡張部が短く直立して立ち上がり、口縁端部に面をもつ。拡張部の外面下半に7条単位の櫛描き波状文、口縁端部に櫛描きの直線文が巡る。71は安定した平底の底部。

72～88は甕。72は頸部直下の外面に、3条以上のヘラ描き沈線が巡る。口縁部は直線的に「く」の字に外反するものが大半で、複合口縁となるもの（81）もある。前者の中には、口縁部が直立ぎみに立ち上がり、端部外面を強い横ナデによって窪ませるもの（79）や口縁端部が面取り風に平坦な面をもち、尖りぎみに終わるもの（73）などもある。79は胴部がヘラミガキされている。施文は頸部外面にヘラによる刺突文（78・79）がみられる。81は頸部から反転して斜外方に立ち上がる口縁部をもつ。口縁端部は尖りぎみに終わる。82～88は底部で、底径の小さい平底で刷毛目仕上げされるものが大半を占めるが、外面の刷毛目が底部端までおよぶもの（86）もある。

89は胴部の開きぐあいから鉢と考えられる。底部側面に粘土帯を貼付し、高台状に造出する。内外面とも刷毛目仕上げ。

90～93は高坏。90・91は脚部を坏部に接合する高坏。90は長脚で、中空の脚柱部からゆるやかに開き、裾部でわずかに内弯する。透かし穴は焼成後に三方に穿孔されている。外面はヘラミガキ、内面下半は横・斜刷毛目仕上げされる。91は中位付近で屈曲して大きく開く脚部をもつ。坏部内面および脚部上端部外面はヘラミガキされる。92・93は脚裾部で、裾部でやや外反するもの（92）と直線的に裾部に移行するもの（93）などがある。93は外面が刷毛目ののち、ヘラミガキされる。

94・95は甕の蓋。94は天井部の摘み部が中窪みで、体部の三方に2個単位の焼成前穿孔が行われる。95は体部から直線的に裾部に移行する小形の蓋で、天井部内面は強い指圧によって窪ませる。体部内面はヘラミガキされる。

96・97は支脚。96は小形の土製支脚で、突起部を欠損する。上面中央部は中空の内側か

ら焼成前穿孔される。97は残存部分の平面形態が五角形で、全体の形状はわからないが、土製の支脚であろう。全体を指圧によって整形する。

第2層出土遺物（98～120）

98～107は壺。98は肩部に削り出しによる段をもち、ヘラによる2条の沈線の下位に羽状文を施文する。99は複合口縁をもつもの。直立して立ち上がる口縁部は上半部で外反し、拡張部は直線的に内傾する。拡張部への施文はない。100は大きく外反する口縁部をもつ。101は短く外反する口縁部の端部内面に平坦な広い面をもつ。102は不安定な平底に球形の胴部をもつ。口縁部は「く」に字に短く外反するものであろう。胴部内面はナデ、外面下半は縦刷毛目仕上げされる。底部側面には焼成後の穿孔がみられる。103～107は底部。103～106は円盤状の安定した平底で、底径には大小がある。107は胴部が底部から直線的にあまり開かず立ち上がり、外面は底部端までおよぶ丁寧な縦刷毛目仕上げされる。

108～113は甕。108は口縁端部下端にヘラによる刻み目を施す。109は張りのない胴部をもち、口縁部は如意形に外反する。胴部には1条のヘラ描き沈線が巡り、口縁端部のほぼ全面にヘラによる刻み目を施す。110・111は「く」の字に外反する口縁部をもつもので、外弯して開くもの（110）と直線的に開くもの（111）などがある。112・113は底部。113は外面が丁寧な縦刷毛目仕上げされ、底部側面を指圧により押える。

114～118は高坏。114は内弯して立ち上がる坏部の上半部で反転して、外弯しながらゆるやかに開く口縁部をもつ。反転部内面には稜をもつ。115～117は脚柱部で、長脚のものと短脚のものとがある。115は脚裾部が大きく外方に屈曲する。116・117は坏部を脚部の側面に接合し、外面をヘラミガキする。透し穴は三方に焼成前穿孔されるもの（115・116）がある。118は脚裾部で、裾部まで直線的にゆるやかに開く。外面はヘラミガキされる。

119・120は鉢。119は小形の鉢。窪み底の底部から胴部は内弯して立ち上がり、そのまま口縁部に移行する。底部側面は指圧により押えられ、高台状に仕上げられている。外面はナデ、胴部内面はヘラミガキののちナデている。120は口縁部が短く外反する。

第3層出土遺物（121～140）

121～130は壺。121～127は胴上半部から肩部。施文は羽状文で、貝殻によるものが大半であるが、ヘラによるもの（123）もある。無軸羽状文が多いが、有軸のもの（125）もある。126・127は肩部に削り出しによる段をもつ。内外面ともヘラミガキのもの（124・126）、ナデ・横ナデのもの（121・122）および外面刷毛目、内面ナデのもの（127）などがある。128～130は底部。128・130は安定した円盤状の平底の底部。129も平底の底部で内

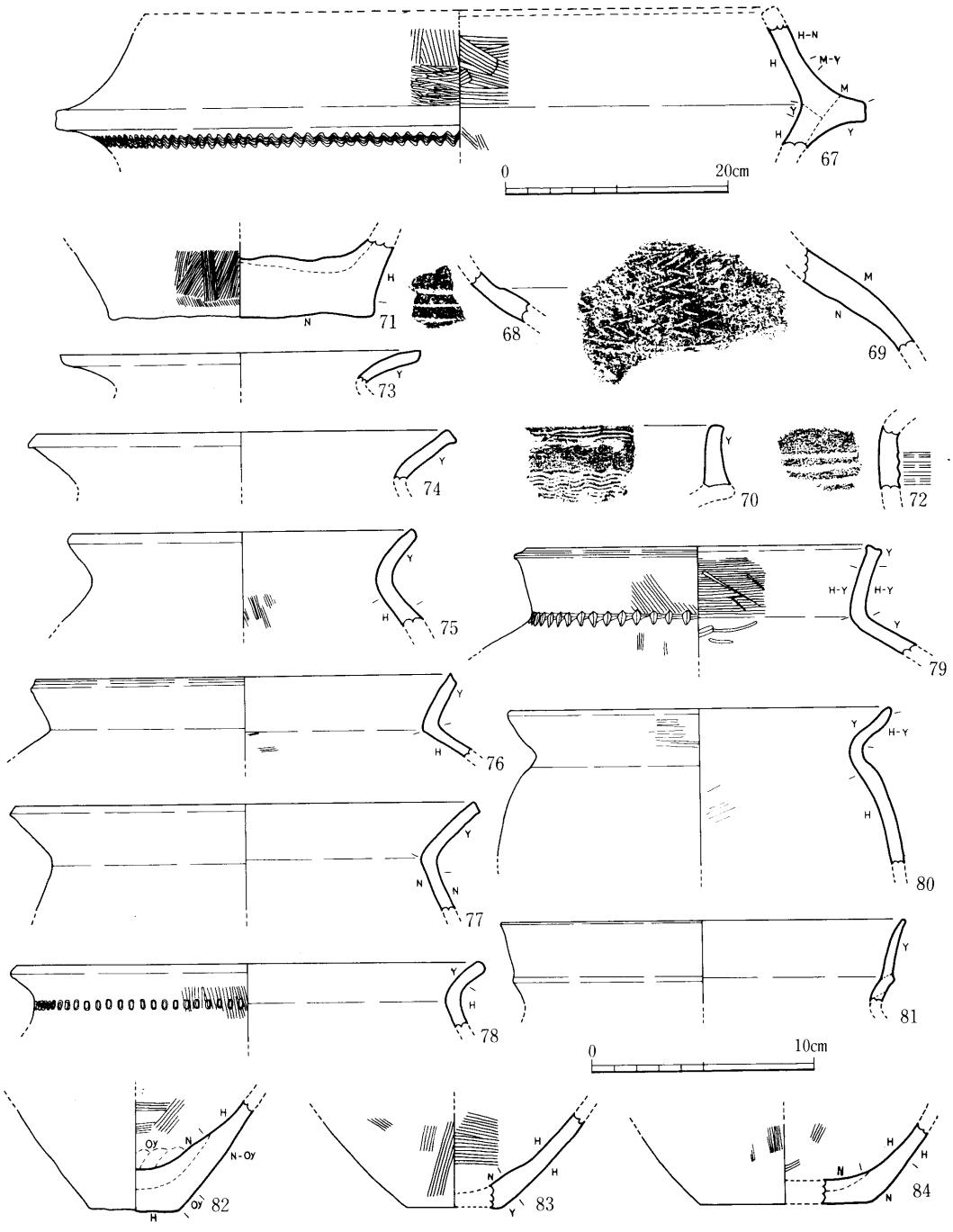


Fig. 60　第２号溝出土遺物実測図(1)

第１号溝出土遺物

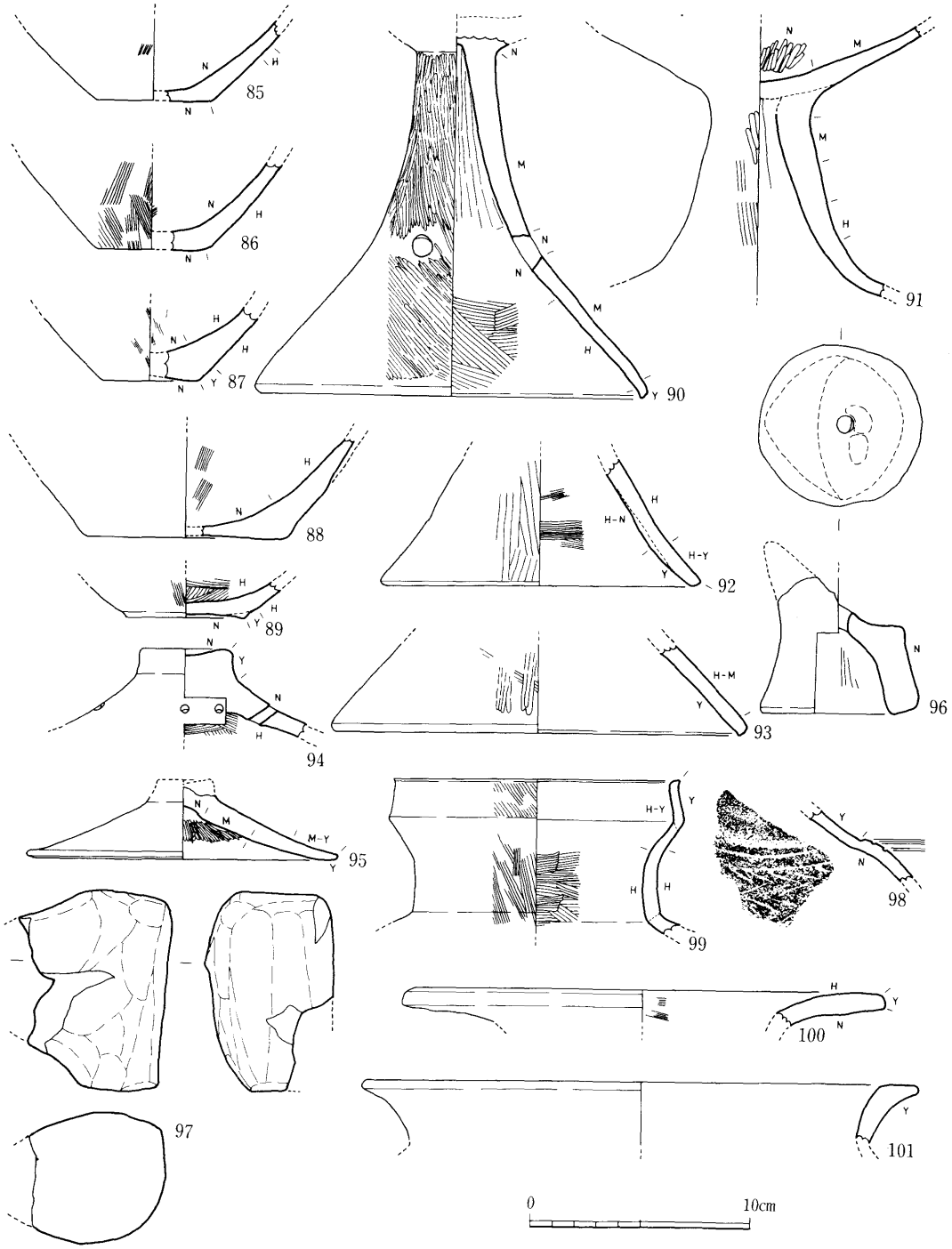


Fig. 61　第２号溝出土遺物実測図(2)

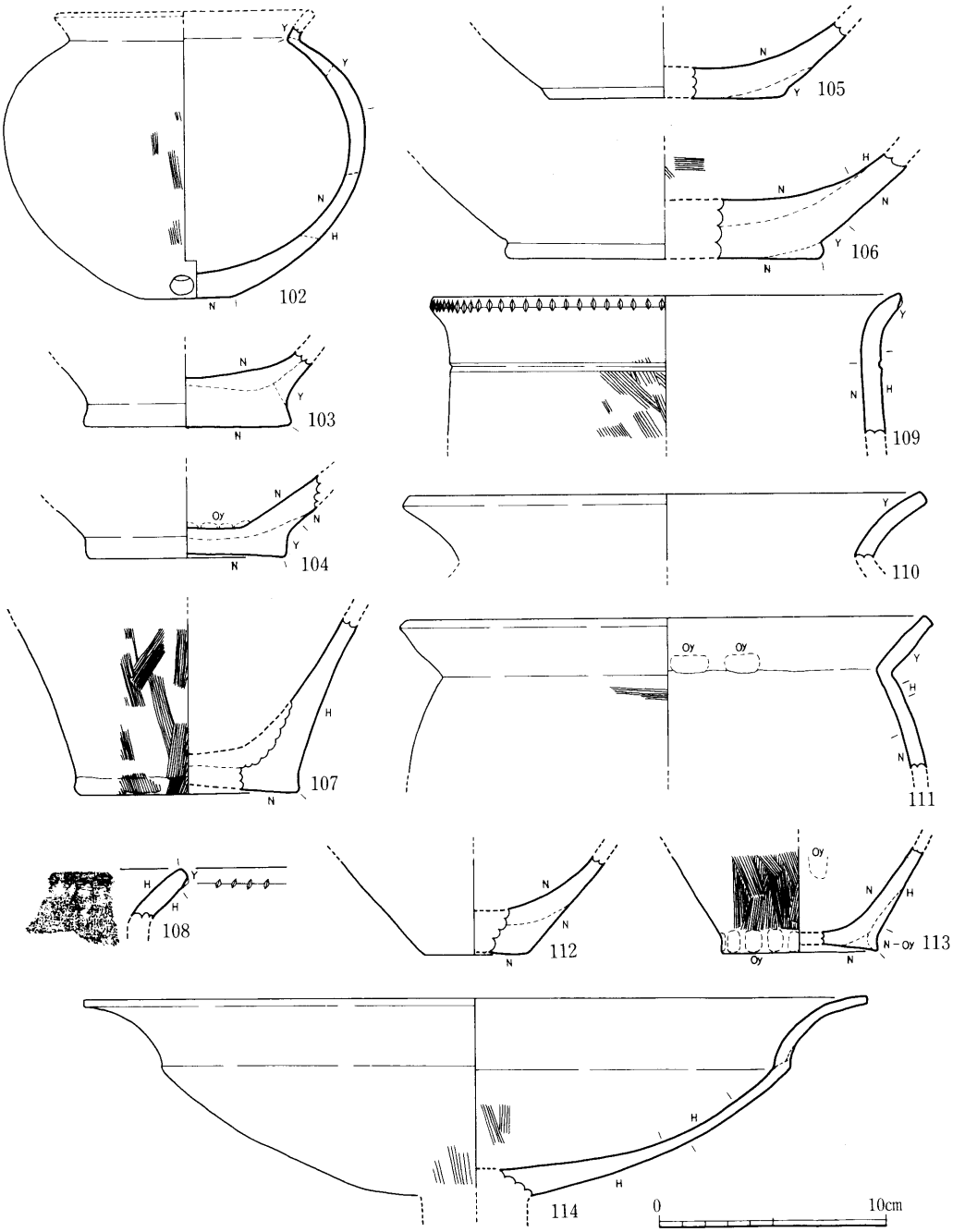


Fig. 62　第２号溝出土遺物実測図(3)

第１号溝出土遺物

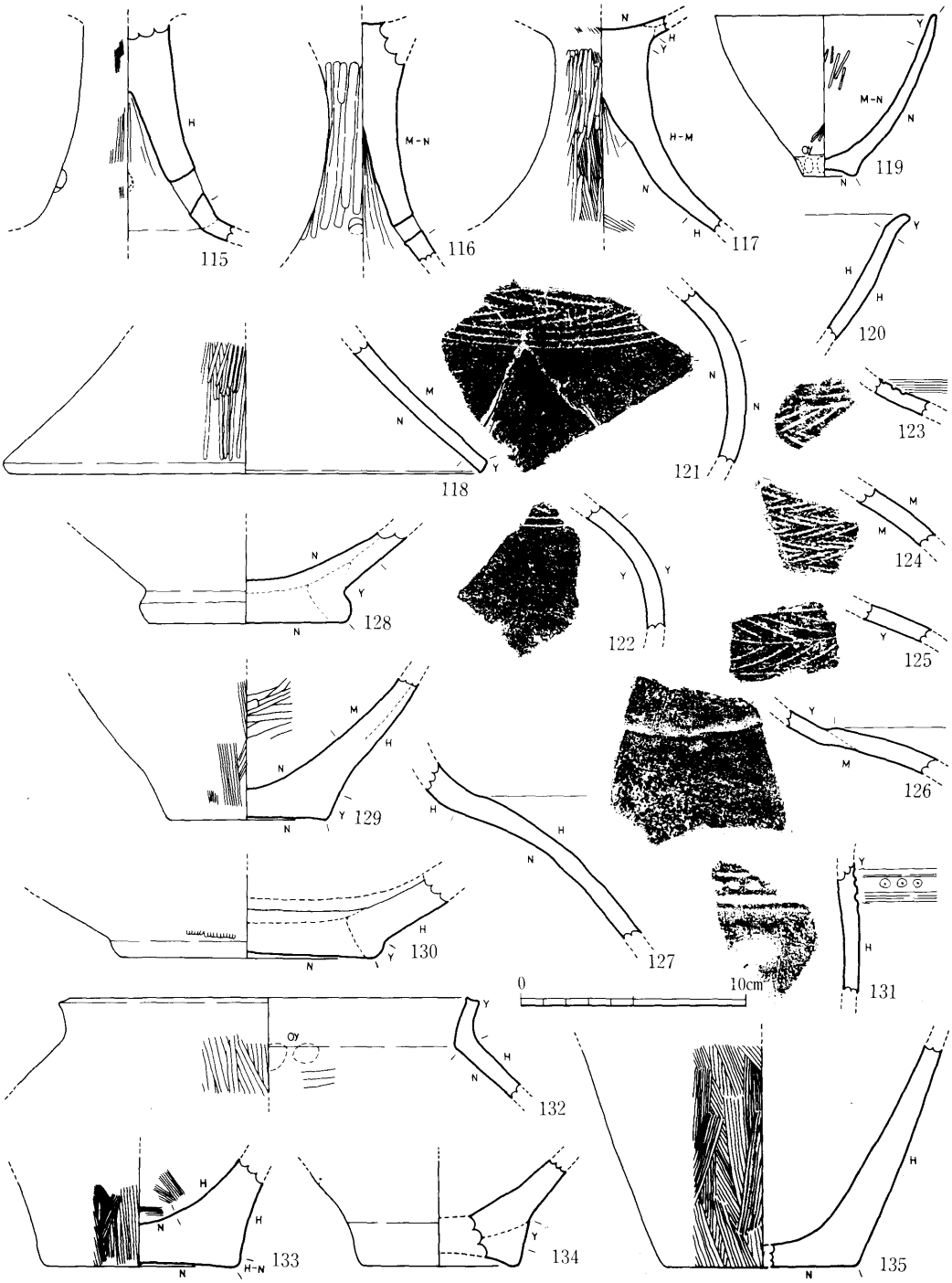


Fig. 63　第２号溝出土遺物実測図(4)

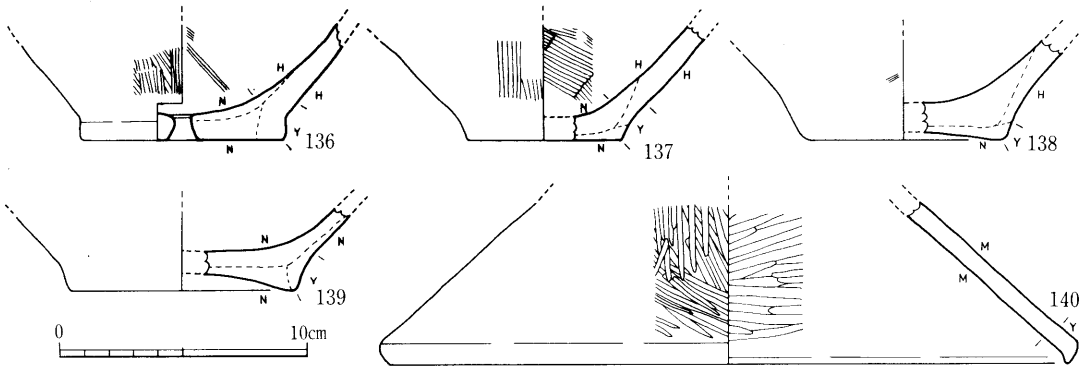


Fig. 64　第2号溝出土遺物実測図(5)

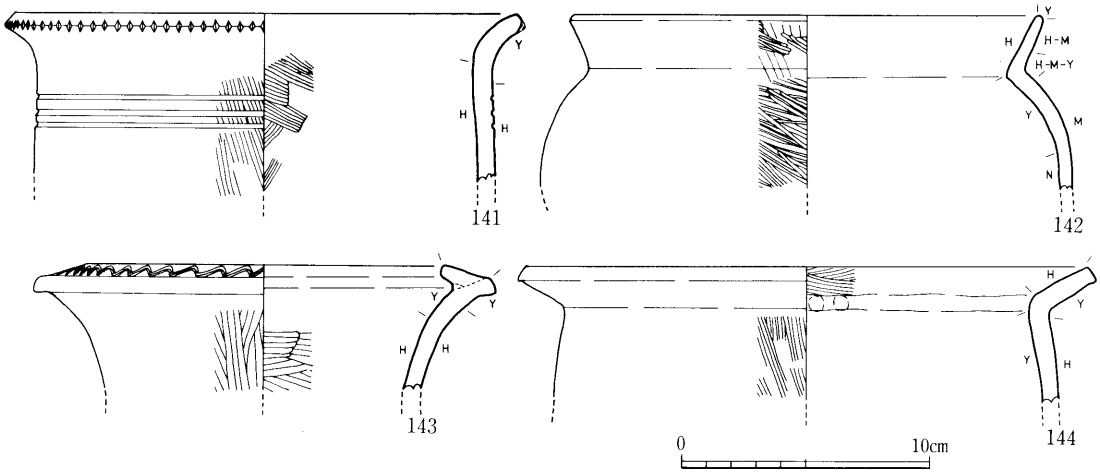


Fig. 65　第3・7号溝出土遺物実測図

面をヘラミガキする。

131～139は甕。131は胴上半部で、ヘラ描きの沈線間に刺突文を刻む。132は直立ぎみに「く」の字に外反する短い口縁部をもつ。胴部内外面は粗い刷毛目を施す。133～139は底部。平底のもの（133・135～137）とやや上げ底のもの（134・138・139）がある。134は縄文土器。135は胴部が底部から直線的に立ち上がる。136は底部中央部に外面から焼成後に穿孔される。外面は刷毛目仕上げが多く、底部端までおよぶもの(133・135)もある。

140 は高坏の脚裾部で、直線的に開き端部内面は内側に屈曲する。外面上半は縦方向、下半および内面は横・斜め方向のヘラミガキがおこなわれる。

第3号溝出土遺物(Fig. 65－141・142，PL. 36・37)

141・142 は甕。141 は張りのほとんどない胴部に如意形に外反する口縁部をもつ。胴部

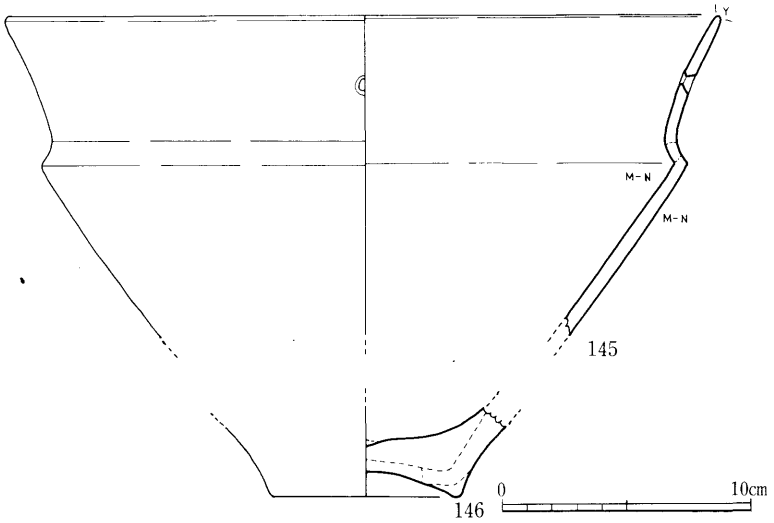


Fig. 66　第2号土壙出土遺物実測図

上半には3条のヘラ描き沈線が巡り、平坦な口縁端部の下端にヘラによる刻み目を施す。胴部内外面は縦・斜め刷毛目仕上げされる。142は口縁部が「く」の字に外反し、直線的に開く。外面は刷毛目ののちヘラミガキされる。

第7号溝出土遺物（Fig. 65－143・144，PL. 37）

143は複合口縁の壺。拡張部は未発達で短く内傾し、狭い拡張部の外面に3条単位の櫛描き波状文を施文する。内外面は粗い刷毛目仕上げされる。144は直線的に「く」の字に外反する口縁部をもつ甕で、口縁部内面には刷毛目が残る。

第2号土壙出土遺物（Fig. 66，PL. 37・39）

145・146は縄文土器。145は精製の浅鉢で、胴部は直線的に立ち上がり、口縁部は短い頸部から屈曲して外弯ぎみに開く。口縁部は長く、端部は丸い。内外面とも丁寧なヘラミガキがなされ、口縁部の中位には焼成後，内外面から穿孔される。146は粗製、上げ底の甕もしくは深鉢の底部。

石器（Fig. 67，PL. 39）

147は局部磨製石斧。撥形を呈し、刃部は局部的に磨かれる。背腹両面の中央部は比較的大きな剥離面によって構成されているが、基部および両縁辺には丁寧な調整加工が施される。148・149・151は使用痕のある剥片。148は素材となる剥片の剥離後に、周囲から二次加工を施す。腹面下縁に使用痕が認められる。149は不定形な縦長剥片の腹面上端および中位に微細な剥落痕が認められる。背面中央部に原礫面を残す。151は複剥離打面をもつ剥片

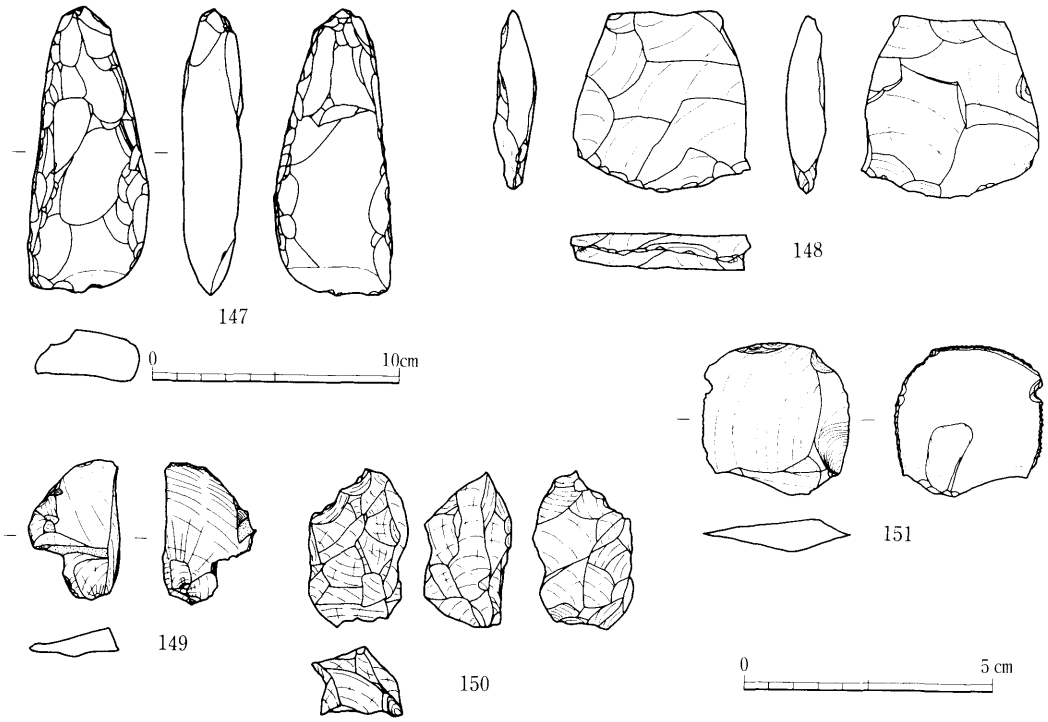


Fig. 67　石器実測図

で、下縁を除く各縁辺に連続する微細な剝落痕が認められる。150 は削器。147 は第 1 号溝中層、148～150 は第 2 号溝第 1 層、151 は第 1 号土壙出土。

5　小結

今回の調査では溝15条、縄文時代晩期の土壙 2 基などを検出した。溝の詳細な時期がわかるのは、弥生時代中期後半～後期初頭 1 条（第 3 号溝）、後期初頭 1 条（第 7 号溝）、後期後半 2 条（第 1 ・ 2 号溝）の計 4 条である。他の溝は時期決定する資料に乏しく、弥生時代 3 条、近世 8 条の溝である。

弥生時代の溝はすべて直線的もしくは蛇行しながら南西から北東の走行しており、溝幅は後期初頭までの 2 条が平均60～70cmであるが、後期後半の 2 条は平均約1.5m と規模を拡大している。第 1 号溝は流路方向・時期・規模などから第 2 号溝が埋没した後、比較的短期間のうちに再掘削されたものと考えられる。

調査地域のすぐ東側には、南にそびえる今山と高倉山の谷あいの溜池に水源をもつ大塚川が南東から北西に走行している。また、吉田構内のサッカー場からラグビー場の南西縁には、大塚川と同様に南東から北西に流路をもつ縄文時代から弥生時代にかけての河川跡

が検出されている[1]。大塚川が弥生時代まで遡るかどうか現状では判断しがたいが、弥生時代の各溝の埋積土は礫を含まず、砂質土や粘質土で構成されていることから、河川の氾濫を防御するために掘削されたものとは考えられず、両方もしくは一方の河川跡からの農業用の水利灌漑を目的に掘削されたものと想定される。

吉田構内では「遺跡保存地区」をはじめとして、弥生時代中期から古墳時代前期の集落が検出されている[2]が、生産基盤となる水田跡、また水田土壌となるグライ土壌はほとんど確認されていない。実際に、先に述べた養護学校敷地での第1次試掘調査では、褐色や青灰色のグライ土壌が随所で検出されており、養護学校敷地に当該期の水田が営まれていた可能性が十分に考えられる。吉田構内の周辺は東・南側には丘陵がせまり、また、北側は椹野川の広大な氾濫原にあたっており、養護学校敷地周辺を除いた吉田構内の他の地域は水田経営を行うことのできる立地にはないことも傍証となるであろう。

近世の溝は弥生時代の溝と直交して走行しており、現在の畦畔に沿っている。ラグビー場の南西縁では、南東から北西に流路をもつ現在の灌漑水路の下位から、古代から中世の層位的に三時期の杭列が検出されており、「上位は現在の杭で…（中略）…層位的に古い下位は矢板に似た割り材を密に打ち込んでおり、中位の杭列は小丸材を用い[3]」て構築されていたという。吉田構内周辺は古代の条里遺構の存在を示す二ノ坪、八ノ坪などの小字名が残存しており、上記の結果から、近世の水田地割は古代の条里地割線を踏襲していることが推察されるが、詳しいことはわからず今後の調査に期待したい。

吉田構内では従来、縄文時代の遺物は遺物包含層から散発的に出土していたにすぎなかったが、今回、はじめて遺構を検出した。農学部附属農場を除く主要な地域ではすでに数次にわたる調査を実施しているが、縄文時代に遡る遺構は確認されておらず、その立地から養護学校敷地に当該期の集落が埋存している可能性が指摘されるにいたった。（河村）

［注］

1）山口大学吉田遺跡調査団『山口大学吉田遺跡発掘調査概報』（1976年）。

2）山口大学埋蔵文化財資料館『山口大学構内遺跡保存地区の発掘調査（昭和57年度）』（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅴ』、山口大学埋蔵文化財資料館、1986年）。
山口大学埋蔵文化財資料館『山口大学構内遺跡保存地区の発掘調査（昭和59年度）』（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅵ』、山口大学埋蔵文化財資料館、1987年）。
山口大学埋蔵文化財資料館『山口大学構内遺跡保存地区の発掘調査（昭和60・61年度）』（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅷ』、山口大学埋蔵文化財資料館、1990年）。

3）前掲注1）。

Tab. 6　出土遺物観察表

法量(　)復原値

番号	器　　種	法　量(cm) (①口径②底径③器高)	色　　調 (①外面　②内面)	胎土	焼成	備　　考
第1号溝　第1層						
1	弥生土器　壺	①(11.0)	灰白色 (10YR8/2)	不　良	良　好	複合口縁
2	弥生土器　壺		①橙色 (5YR7/6) ②にぶい橙色 (5YR7/3)	やや不良	やや不良	複合口縁 ヘラ山形文
3	弥生土器　壺	①(23.5)	①浅黄橙色 (10YR8/3) ②浅黄橙色 (7.5YR8/3)	良　好	不　良	
4	弥生土器　甕	①(24.4)	淡黄色(2.5Y8/3)	良　好	やや不良	
5	弥生土器　甕	①(21.0)	灰白色 (10YR8/2)	良　好	良　好	
6	弥生土器　甕	①(22.0)	明褐灰色 (7.5YR7/2)	良　好	良　好	
7	弥生土器　甕	①(22.8)	①灰白色 (7.5YR8/2) ②浅黄橙色 (7.5YR8/3)	やや不良	良　好	
8	弥生土器　甕	①(25.9)	①灰白色 (7.5YR8/2) ②浅黄橙色 (7.5YR8/3)	やや不良	良　好	
9	弥生土器　甕	①(21.2)	①灰白色 (2.5Y8/2) ②淡黄色 (2.5Y8/3)	良　好	不　良	
10	弥生土器　甕	①(14.2)	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	良　好	良　好	
11	弥生土器　甕	①(16.8)	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	良　好	良　好	
12	弥生土器　甕	①(17.0)	①淡橙色 (5YR8/3) ②灰白色 (5YR8/1)	良　好	不　良	
13	弥生土器　甕	①(16.4)	灰白色 (10YR8/2)	良　好	不　良	
14	弥生土器　甕	①(14.8)	①浅黄橙色 (7.5YR8/4) ②浅黄橙色 (7.5YR8/3)	精　良	良　好	
15	弥生土器　甕	①(14.0)	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	やや不良	良　好	
16	弥生土器　甕	①(14.1)	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	精　良	良　好	外面煤付着
17	弥生土器　甕	②(2.5)	①浅黄橙色 (10YR8/3) ②浅黄橙色 (10YR8/4)	良　好	良　好	
18	弥生土器　甕	②(5.3)	①褐灰色 (10YR6/1) ②にぶい黄橙色 (10YR7/3)	良　好	良　好	
19	弥生土器　甕	②(5.1)	①にぶい黄橙色 (10YR7/3) ②褐灰色 (10YR6/1)	不　良	良　好	
20	弥生土器　甕	①(11.2)	灰白色 (10YR8/2)	やや不良	やや不良	
21	弥生土器　甕	②(6.8)	①灰黄褐色 (10YR6/2) ②褐色 (10YR5/1)	良　好	良　好	
22	弥生土器　高坏	①(27.6)	灰白色 (10YR8/2)	良　好	良　好	
23	弥生土器　高坏	①(25.8)	浅黄橙色 (10YR8/3)	良　好	良　好	
24	弥生土器　高坏	②(13.6)	赤橙色 (10R6/8)	精　良	良　好	
25	弥生土器　高坏		にぶい黄橙色 (10YR7/2)	不　良	良　好	
26	弥生土器　高坏		橙色 (7.5YR6/8)	不　良	やや不良	
27	弥生土器　高坏	②(19.0)	①灰白色 (10YR8/2) ②褐灰色 (10YR4/1)	良　好	良　好	
28	弥生土器 蓋(甕)		①浅黄橙色 (7.5YR8/3) ②浅黄橙色 (10YR8/3)	良　好	良　好	
第2層						
29	弥生土器　壺	①(10.0)	にぶい橙色 (5YR7/4)	精　良	良　好	
30	弥生土器　壺		灰白色 (10YR8/2)	良　好	やや不良	貝殻無軸羽状文
31	弥生土器　壺		灰白色 (10YR8/2)	精　良	良　好	貝殻無軸羽状文
32	弥生土器　壺		灰白色 (10YR8/2)	やや不良	良　好	貝殻無軸羽状文
33	弥生土器　壺	①(10.8)	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	精　良	良　好	複合口縁
34	弥生土器　甕	①(16.4)	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	良　好	不　良	複合口縁

出土遺物観察表

法量(　)復原値

番号	器　　種	法　量(cm) (①口径②底径③器高)	色　　調 (①外面　②内面)	胎土	焼成	備　　考
35	弥生土器　甕	①(18.7)	浅黄橙色（7.5YR8/6）	良　好	良　好	
36	弥生土器　甕	①(15.5)	①淡橙色（5YR8/4） ②浅黄橙色（10YR8/4）	良　好	良　好	
37	弥生土器　甕	①(15.1)	①橙色（5YR7/8） ②淡橙色（5YR8/4）	精　良	良　好	
38	弥生土器　甕	①(25.9)	①淡橙色（5YR8/3） ②淡橙色（5YR8/4）	精　良	良　好	
39	弥生土器　甕	①(15.4)	にぶい橙色（7.5YR7/4）	精　良	良　好	
40	弥生土器　甕	②3.8	①にぶい橙色（7.5YR7/4） ②浅黄橙色（7.5YR8/3）	良　好	良　好	
41	弥生土器　甕	②4.2	明灰褐色（7.5YR7/2）	良　好	良　好	
42	縄文土器 深鉢 or 甕	②5.0	①明褐灰色（5YR5/8） ②にぶい橙色（5YR6/3）	良　好	良　好	粗製
43	弥生土器　甕	②3.7	①にぶい橙色（2.5YR6/4） ②明褐灰色（5YR7/2）	やや不良	良　好	
44	弥生土器　甕	②7.2	①橙色（5YR7/8） ②橙色（5YR7/6）	不　良	良　好	
45	弥生土器　甕		①明褐灰色（7.5YR7/2） ②褐灰色（7.5YR5/1）	精　良	良　好	
46	弥生土器　高坏	①(30.4)	①灰白色（10YR7/1） ②にぶい黄橙色（10YR7/2）	精　良	良　好	
47	弥生土器　高坏	②(15.3)	にぶい橙色（5YR6/4）	良　好	良　好	
48	弥生土器　高坏	②(13.1)	浅黄橙色（10YR8/4）	良　好	良　好	
49	弥生土器　鉢	①(18.6)	にぶい橙色（5YR6/4）	良　好	良　好	
第3層						
50	弥生土器　壺		①灰白色（10YR8/2） ②灰褐色（7.5YR6/2）	やや不良	良　好	
51	弥生土器　壺		①灰白色（10YR8/2） ②灰白色（10YR7/2）	不　良	良　好	
52	弥生土器　壺	②(7.2)	①黒色（10YR2/1） ②灰白色（10YR7/1）	良　好	良　好	
53	弥生土器　壺	②(8.7)	淡橙色（5YR8/4）	やや不良	良　好	
54	弥生土器　甕		にぶい黄橙色（10YR7/3）	良　好	良　好	
55	弥生土器　甕		①にぶい橙色（7.5YR7/3） ②にぶい黄橙色（10YR7/3）	良　好	良　好	
56	弥生土器　甕		にぶい褐色（7.5YR6/3）	不　良	やや不良	
57	弥生土器　甕		①にぶい褐色（7.5YR6/3） ②にぶい橙色（7.5YR6/4）	不　良	不　良	
58	弥生土器　甕	①(18.4)	淡橙色（5YR8/3）	良　好	良　好	外面煤付着
59	弥生土器　甕	①(21.2)	橙色（5YR7/6）	良　好	良　好	
60	弥生土器　甕	①(11.2)	淡橙色（5YR8/4）	良　好	良　好	外面煤付着
61	弥生土器　甕	①(16.0)	淡橙色（5YR8/4）	やや不良	良　好	複合口縁
62	弥生土器　甕	①(21.2)	にぶい橙色（5YR7/3）	良　好	良　好	外面煤付着
63	弥生土器　甕	①(26.8)	橙色（5YR7/6）	不　良	不　良	
64	弥生土器　甕	①(27.3)	橙色（5YR7/6）	やや不良	不　良	
65	弥生土器　甕	②(6.2)	①褐灰色（7.5YR5/1） ②にぶい黄橙色（10YR7/2）	やや不良	良　好	
66	弥生土器　高坏		淡橙色（5YR8/4）	やや不良	良　好	
第2号溝　第1層						
67	弥生土器　壺		①淡橙色（5YR8/4） ②淡橙色（5YR8/3）	良　好	良　好	複合口縁 櫛描波状文
68	弥生土器　壺		浅黄橙色（7.5YR8/3）	良　好	良　好	貝殻羽状文

法量(　)復原値

番号	器種	法量(cm) (①口径②底径③器高)	色調 (①外面　②内面)	胎土	焼成	備考
69	弥生土器　壺		灰白色（7.5YR8/2）	不良	良好	貝殻無軸羽状文
70	弥生土器　壺		浅黄橙色（7.5YR8/3）	良好	良好	複合口縁 櫛描波状文
71	弥生土器　壺	②11.8	①淡橙色（5YR8/4） ②浅黄橙色（7.5YR8/3）	やや不良	良好	
72	弥生土器　甕		浅黄橙色（7.5YR8/3）	不良	やや不良	
73	弥生土器　甕	②(16.2)	明褐灰色（7.5YR7/2）	不良	良好	
74	弥生土器　甕	②(18.4)	①橙色（5YR6/6） ②橙色（2.5YR7/6）	良好	良好	
75	弥生土器　甕	②(15.2)	橙色（2.5YR6/8）	良好	良好	外面煤付着
76	弥生土器　甕	②(18.7)	橙色（2.5YR7/8）	不良	良好	
77	弥生土器　甕	②(20.6)	にぶい黄橙色（10YR7/3）	不良	良好	
78	弥生土器　甕	②(20.7)	橙色（5YR6/6）	良好	不良	
79	弥生土器　甕	①(15.3)	①浅黄橙色（10YR8/3） ②灰白色（10YR8/2）	精良	良好	ヘラ刺突文
80	弥生土器　甕	①(17.0)	①橙色（5YR7/6） ②黒褐色（10YR3/1）	良好	不良	外面煤付着
81	弥生土器　甕	①(18.0)	淡赤橙色（2.5YR7/4）	良好	やや不良	複合口縁 外面煤付着
82	弥生土器　甕	②(4.0)	①明褐灰色（5YR7/2） ②淡黄色（5YR8/4）	良好	良好	
83	弥生土器　甕	②(4.2)	①にぶい黄橙色（10YR7/3） ②浅黄橙色（10YR8/3）	良好	良好	
84	弥生土器　甕	②(7.8)	①淡赤橙色（2.5YR7/4） ②灰白色（7.5YR8/2）	良好	良好	
85	弥生土器　甕	②(5.2)	灰白色（7.5YR8/2）	良好	良好	
86	弥生土器　甕	②(4.8)	①淡橙色（5YR8/4） ②灰白色（5YR8/2）	良好	良好	
87	弥生土器　甕	②(4.2)	①淡赤橙色（2.5YR7/4） ②灰白色（7.5YR8/2）	良好	良好	
88	弥生土器　甕	②(9.2)	①赤色（10R5/8） ②黒色（10R1.7/1）	不良	やや不良	
89	弥生土器　鉢	②(5.4)	灰白色（7.5YR8/2）	良好	良好	
90	弥生土器　高坏	②17.1	にぶい黄橙色（10YR7/3）	不良	良好	
91	弥生土器　高坏		①橙色（2.5YR7/6） ②淡橙色（5YR8/3）	やや不良	やや不良	
92	弥生土器　高坏	②(13.9)	浅黄橙色（10YR8/4）	良好	良好	
93	弥生土器　高坏	②(18.1)	にぶい黄橙色（10YR7/2）	良好	良好	
94	弥生土器　蓋		浅黄橙色（10YR8/4）	良好	やや不良	
95	弥生土器　蓋	①13.1	灰黄褐色（10YR6/2）	良好	良好	
96	弥生土器　支脚	②4.8	橙色（2.5Y7/6）	精良	やや不良	
97	弥生土器　支脚		浅黄橙色（7.5YR8/3）	精良	良好	
第2層						
98	弥生土器　壺		①灰白色（10YR8/2） ②黒褐色（10YR3/1）	良好	やや不良	ヘラ無軸羽状文
99	弥生土器　壺	①(12.9)	橙色（2.5YR7/6）	良好	良好	複合口縁
100	弥生土器　壺	①(21.0)	灰白色（10YR8/2）	やや不良	良好	
101	弥生土器　壺	①(21.8)	橙色（5YR7/8）	良好	不良	
102	弥生土器　壺	②3.8	灰白色（7.5YR8/2）	良好	良好	底部側面焼成後穿孔
103	弥生土器　壺	②9.2	①橙色（2.5YR7/6） ②にぶい橙色（5YR7/4）	良好	良好	

出土遺物観察表

法量(　)復原値

番号	器　　種	法　量(cm) (①口径②底径③器高)	色　　調 (①外面　②内面)	胎土	焼成	備　　考
104	弥生土器　壺	②(8.5)	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	不　良	良　好	
105	弥生土器　壺	②(10.2)	①淡橙色 (5YR8/4) ②灰白色 (5YR8/1)	やや不良	やや不良	
106	弥生土器　壺	②(13.6)	浅橙色 (5YR8/3)	良　好	良　好	
107	弥生土器　壺	②(9.3)	浅黄橙色 (10YR8/3)	やや不良	やや不良	
108	弥生土器　甕		①にぶい黄橙色 (10YR7/3) ②灰黄褐色 (10YR4/2)	良　好	良　好	
109	弥生土器　甕	①(20.2)	にぶい橙色 (7.5YR7/3)	やや不良	やや不良	
110	弥生土器　甕	①(22.3)	①浅黄橙色 (7.5YR8/4) ②浅黄橙色 (7.5YR8/3)	不　良	不　良	
111	弥生土器　甕	①(22.5)	淡橙色 (5YR8/4)	不　良	良　好	
112	弥生土器　甕	②(4.5)	①にぶい黄橙色 (10YR7/3) ②灰黄褐色 (10YR6/2)	良　好	良　好	
113	弥生土器　甕	②(6.7)	①にぶい橙色 (7.5YR7/3) ②褐灰色 (5YR4/1)	良　好	良　好	
114	弥生土器　高坏	①(34.2)	①橙色 (2.5YR7/8) ②淡橙色 (5YR8/3)	不　良	良　好	
115	弥生土器　高坏		①浅黄橙色 (7.5YR8/4) ②橙色 (5YR7/6)	不　良	不　良	
116	弥生土器　京坏		橙色 (2.5YR7/6)	不　良	良　好	
117	弥生土器　高坏		淡橙色 (5YR8/3)	精　良	良　好	
118	弥生土器　高坏	②(21.0)	①にぶい黄橙色 (10YR7/2) ②にぶい橙色 (7.5YR7/3)	精　良	良　好	
119	弥生土器　鉢	①9.7　②2.3　③7.1	①灰白色 (10YR8/1) ②灰白色 (10YR8/2)	良　好	良　好	
120	弥生土器　鉢		①淡橙色 (5YR8/3) ②にぶい黄橙色 (10YR7/3)	やや不良	やや不良	
第3層						
121	弥生土器　壺		淡橙色 (5YR8/4)	良　好	良　好	貝殻無軸羽状文
122	弥生土器　壺		淡橙色 (5YR8/3)	良　好	良　好	貝殻羽状文
123	弥生土器　壺		浅黄橙色 (10YR8/3)	精　良	良　好	ヘラ無軸羽状文
124	弥生土器　壺		にぶい黄橙色 (10YR7/3)	良　好	良　好	貝殻無軸羽状文
125	弥生土器　壺		浅黄橙色 (10YR8/3)	やや不良	やや不良	貝殻有軸羽状文
126	弥生土器　壺		①明褐灰色 (7.5YR7/2) ②黒褐色 (7.5YR3/1)	良　好	良　好	
127	弥生土器　壺		にぶい黄橙色 (10YR7/3)	良　好	良　好	
128	弥生土器　壺	②8.6	①淡赤橙色 (2.5YR7/4) ②にぶい橙色 (7.5YR7/3)	良　好	良　好	
129	弥生土器　壺	②7.0	明褐灰色 (7.5YR6/3)	良　好	良　好	
130	弥生土器　壺	②(11.2)	①にぶい橙色 (5YR7/4) ②明褐灰色 (5YR7/2)	良　好	良　好	
131	弥生土器　甕		①にぶい橙色 (5YR7/3) ②灰褐色 (5YR6/2)	不　良	不　良	ヘラ刺突文
132	弥生土器　甕	①(17.5)	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	良　好	良　好	
133	弥生土器　甕	②(8.4)	①淡橙色 (5YR8/4) ②明褐灰色 (5YR7/2)	やや不良	良　好	
134	縄文土器　甕	②(6.9)	①にぶい橙色 (5YR7/4) ②にぶい黄橙色 (10YR7/3)	良　好	良　好	粗製
135	弥生土器　甕	②(8.2)	①にぶい橙色 (7.5YR7/3) ②明褐灰色 (7.5YR7/2)	良　好	良　好	
136	弥生土器　甕	②(8.2)	①灰白色 (10YR8/1) ②灰白色 (10YR8/2)	良　好	良　好	底部焼成後穿孔
137	弥生土器　甕	②(6.4)	灰白色 (10YR8/2)	良　好	良　好	
138	弥生土器　甕	②(8.0)	灰白色 (10YR8/2)	良　好	やや不良	

法量(　)復原値

番号	器　種	法　量(cm) (①口径②底径③器高)	色　調 (①外面　②内面)	胎土	焼成	備　考
139	弥生土器　甕	②(9.0)	淡橙色 (5YR8/3)	良　好	良　好	
140	弥生土器　高坏	②(27.6)	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	精　良	良　好	
第3号溝						
141	弥生土器　甕	①(20.1)	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	良　好	良　好	外面煤付着
142	弥生土器　甕	①(18.6)	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	精　良	良　好	外面煤付着
第7号溝						
143	弥生土器　壺	①(14.3)	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	良　好	良　好	複合口縁 櫛描波状文
144	弥生土器　甕	①(22.8)	①浅黄橙色 (10YR8/3) ②にぶい黄橙色 (10YR7/2)	精　良	良　好	
第2号土壙						
145	縄文土器　浅鉢	①(28.8)	①にぶい黄橙色 (10YR7/2) ②褐灰色 (10YR4/1)	良　好	良　好	精製
146	縄文土器 深鉢 or 甕	②(7.6)	①浅黄橙色 (7.5YR8/3) ②にぶい黄橙色 (10YR7/2)	やや不良	やや不良	粗製

番号	器　種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重　量(g)	石　質	備　考
第1号溝　中層							
147	局部磨製石斧	114.0	47.0	19.0	165.9	泥岩ホルンフェルス	
第2号溝　第1層							
148	使用痕のある剥片	36.0	35.0	7.0	11.2	安山岩	背腹両面に調整加工
149	使用痕のある剥片	28.0	19.0	6.0		腰岳産黒曜石	
150	削　器	31.0	20.0	14.0	11.1	姫島産黒曜石	
第1号土壙							
151	使用痕のある剥片	30.0	30.0	7.0	5.1	姫島産黒曜石	

(1) 調査区近景(北東から)

(2) 調査区全景(北東から)

吉田構内教育学部附属養護学校新営に伴う発掘調査(2)

(1) 溝完掘状況(北東から)

(2) 第1号土壙(北西から)

(3) 第2号土壙(南から)

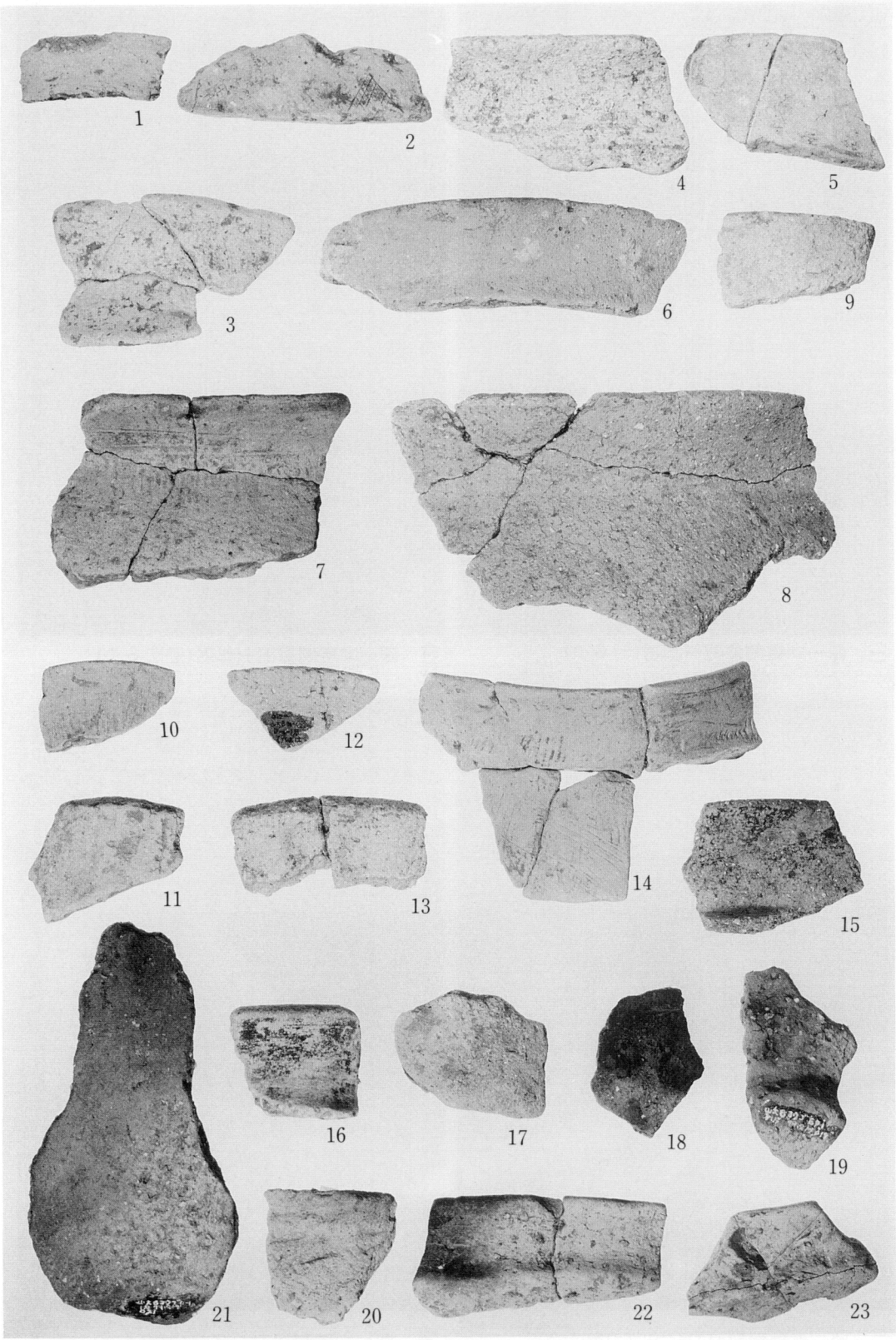
(1) 第1号溝遺物出土状況（北から）

(2) 第1号溝遺物出土状況（南西から）

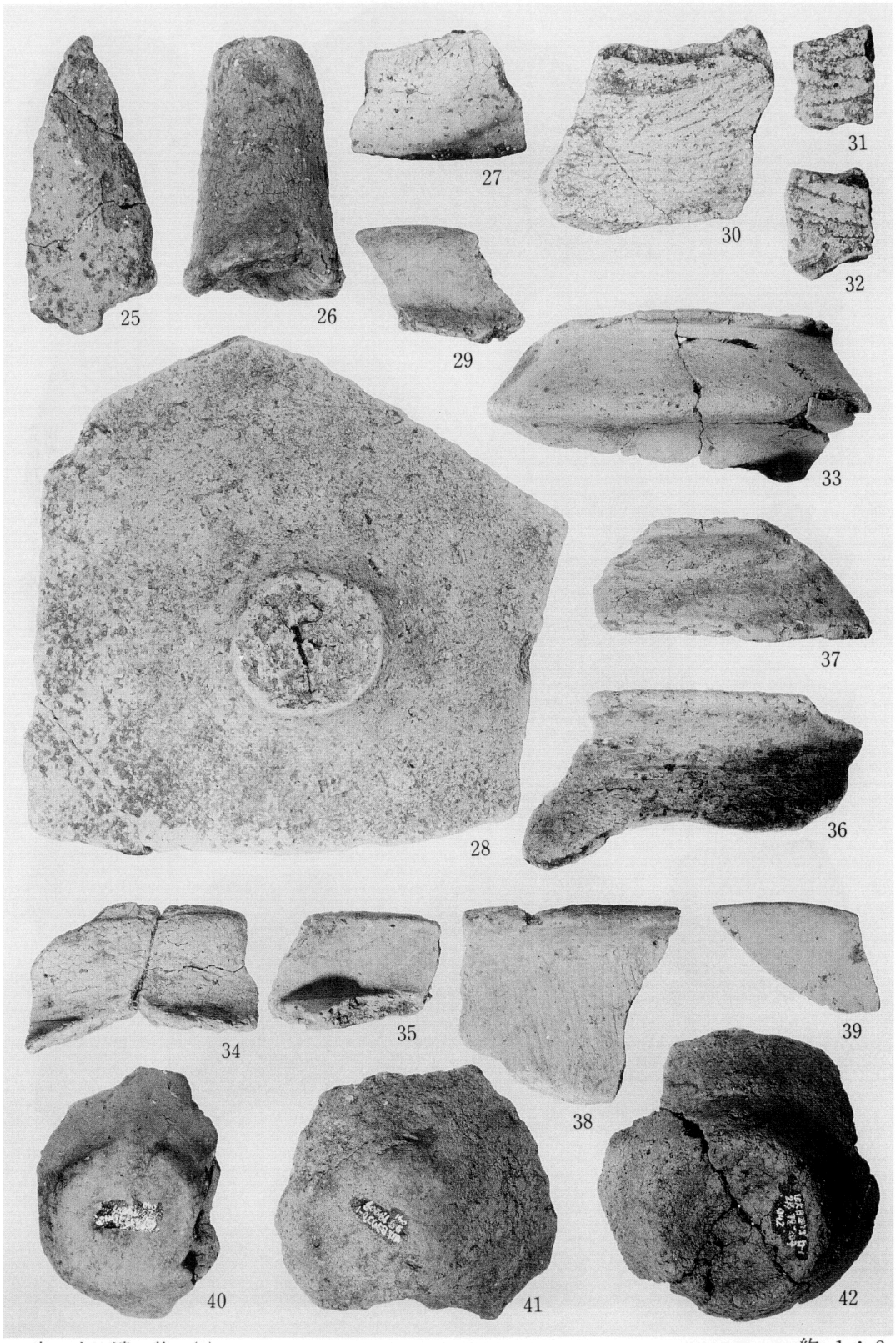
(3) 第1号溝遺物出土状況（北東から）

(4) 第2号溝遺物出土状況（南東から）

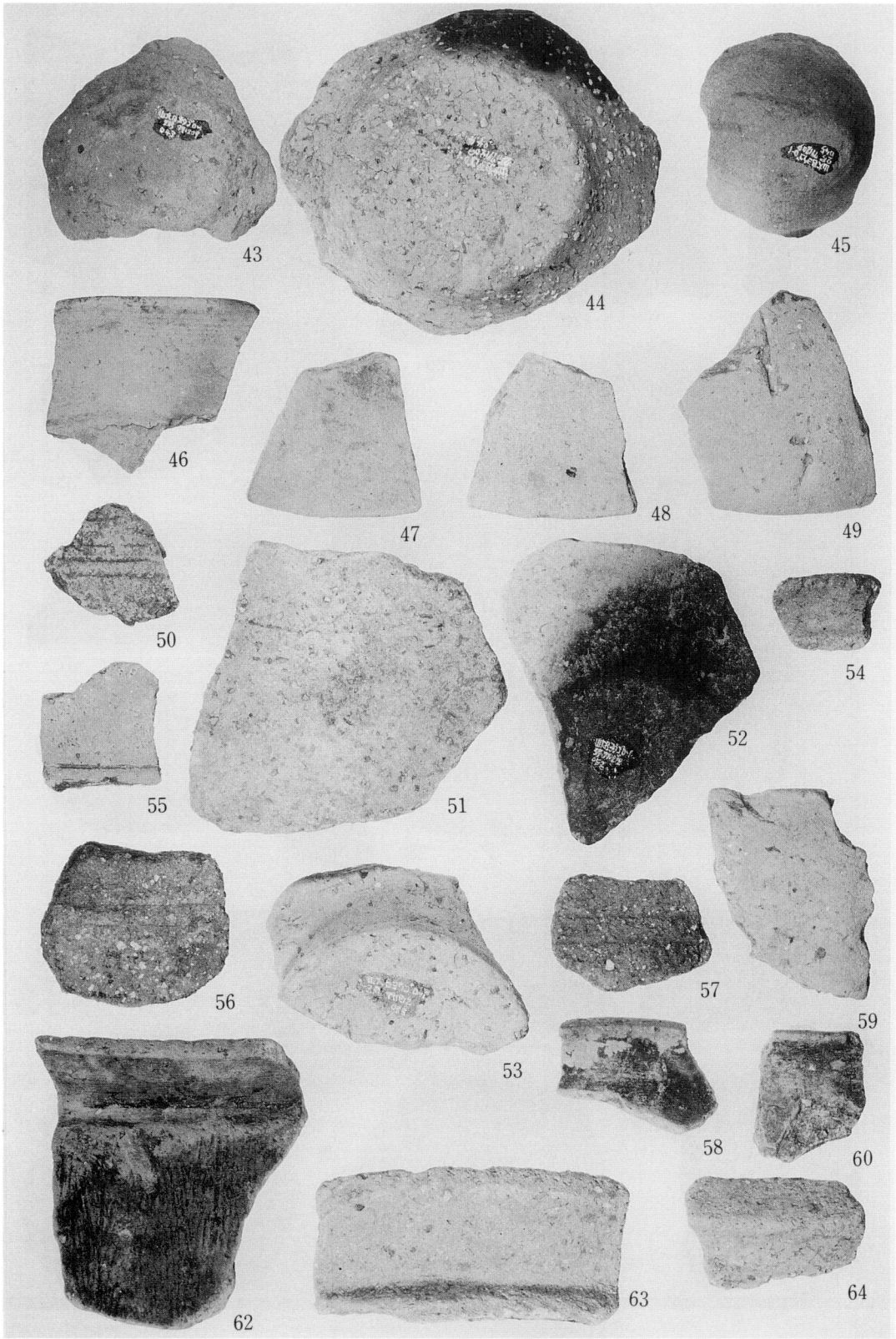
吉田構内教育学部附属養護学校新営に伴う発掘調査 (3)



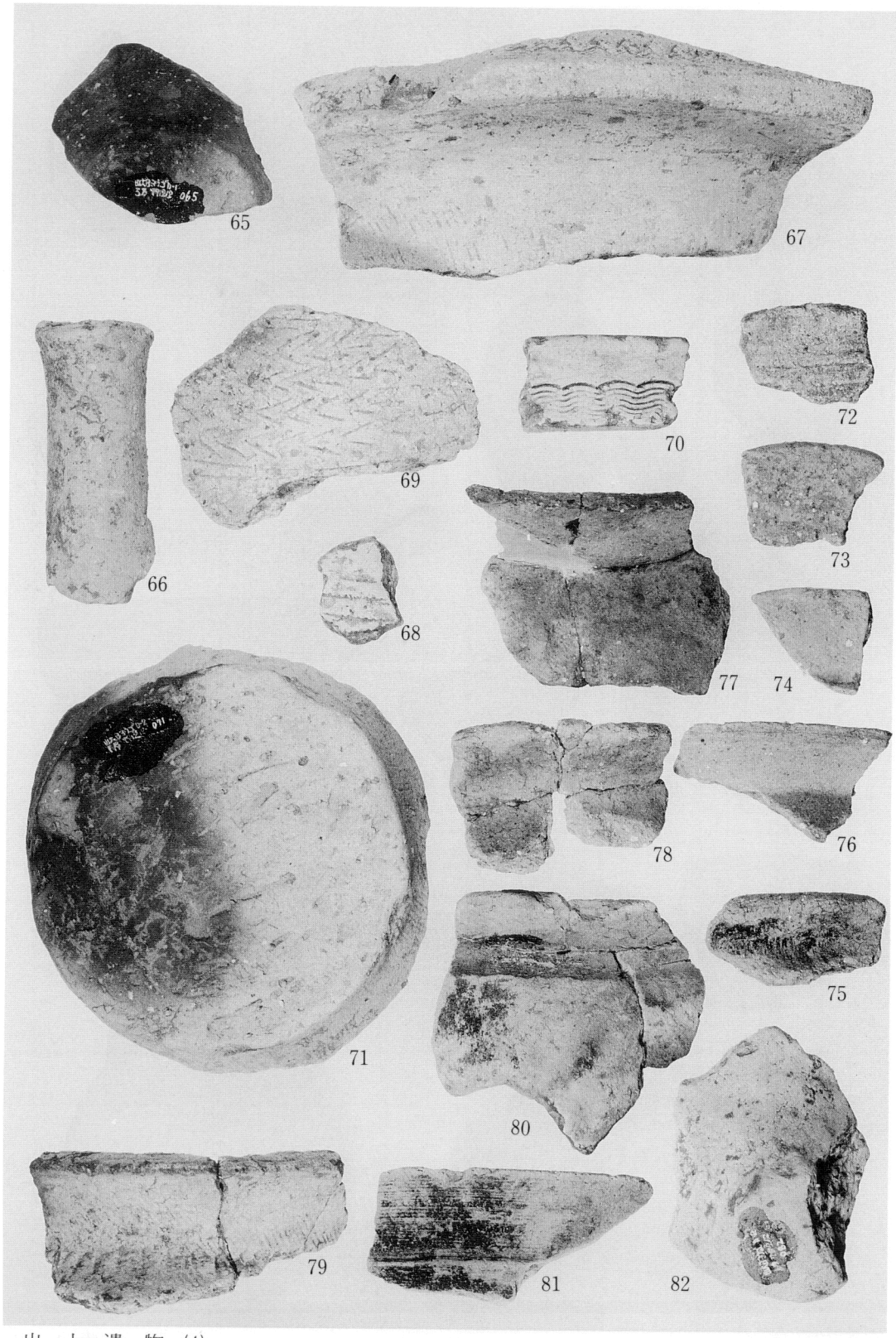
出 土 遺 物 (1)　　約 1：2



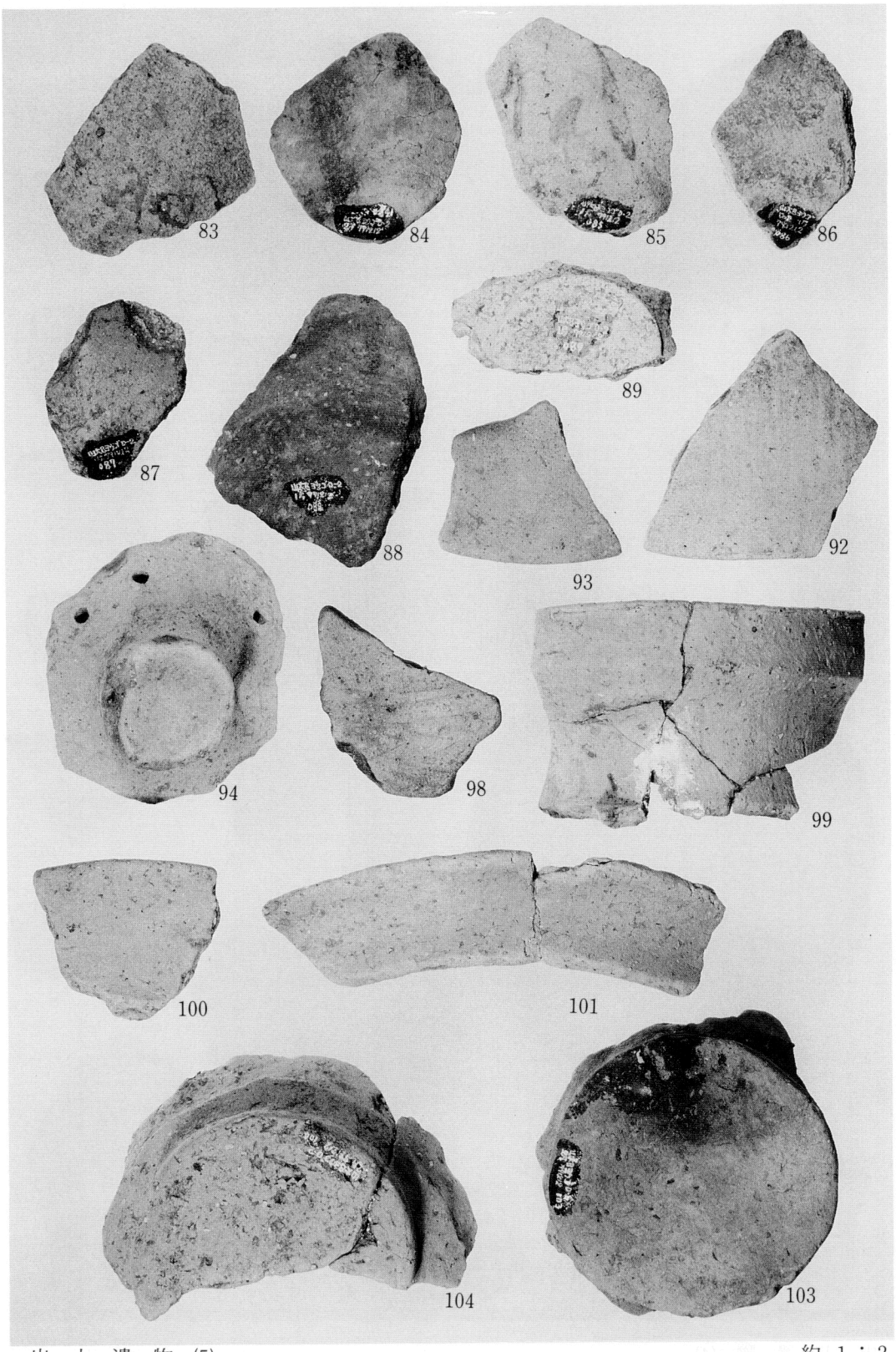
出 土 遺 物 (2)　　約 1：2



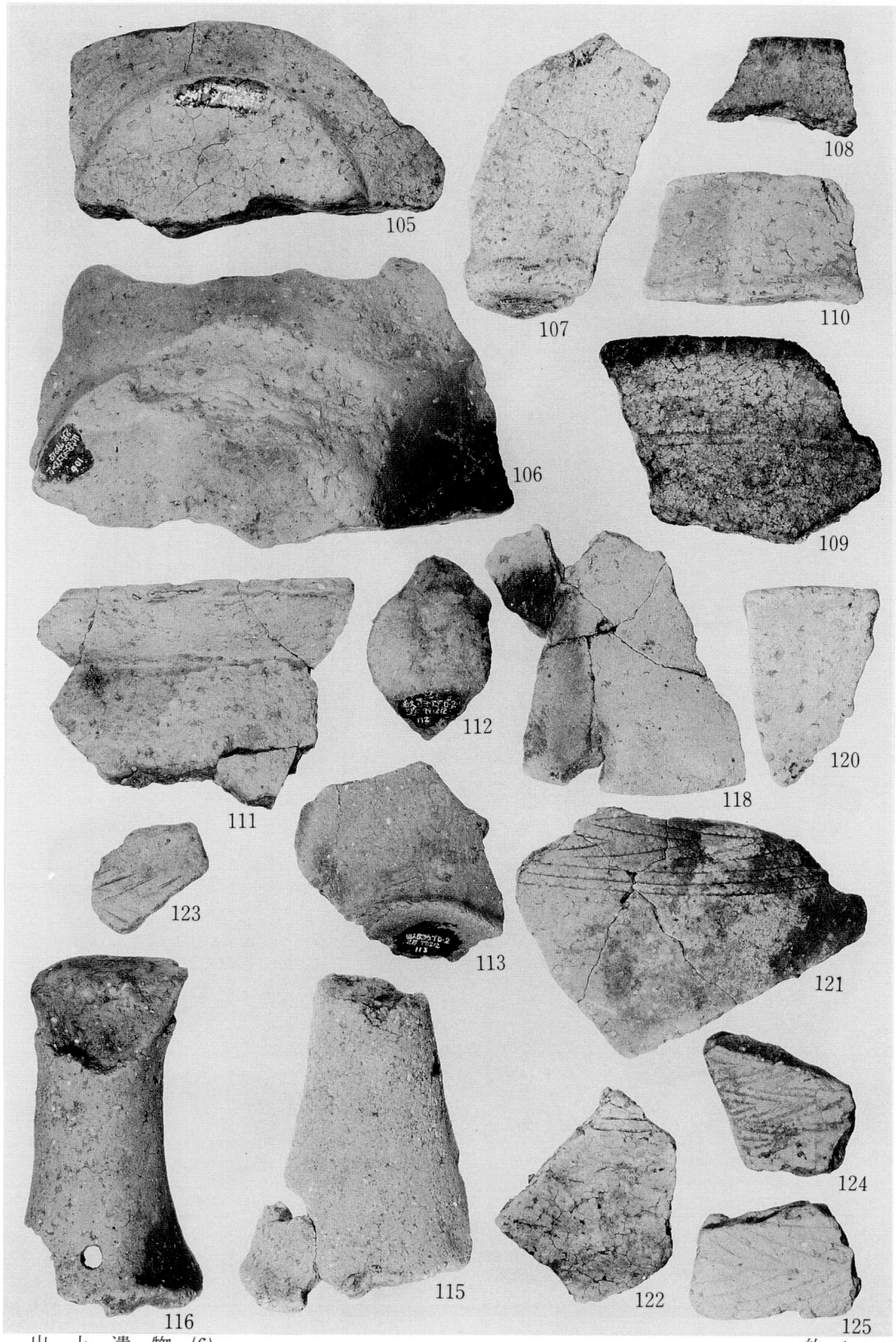
出土遺物 (3)　　約 1：2



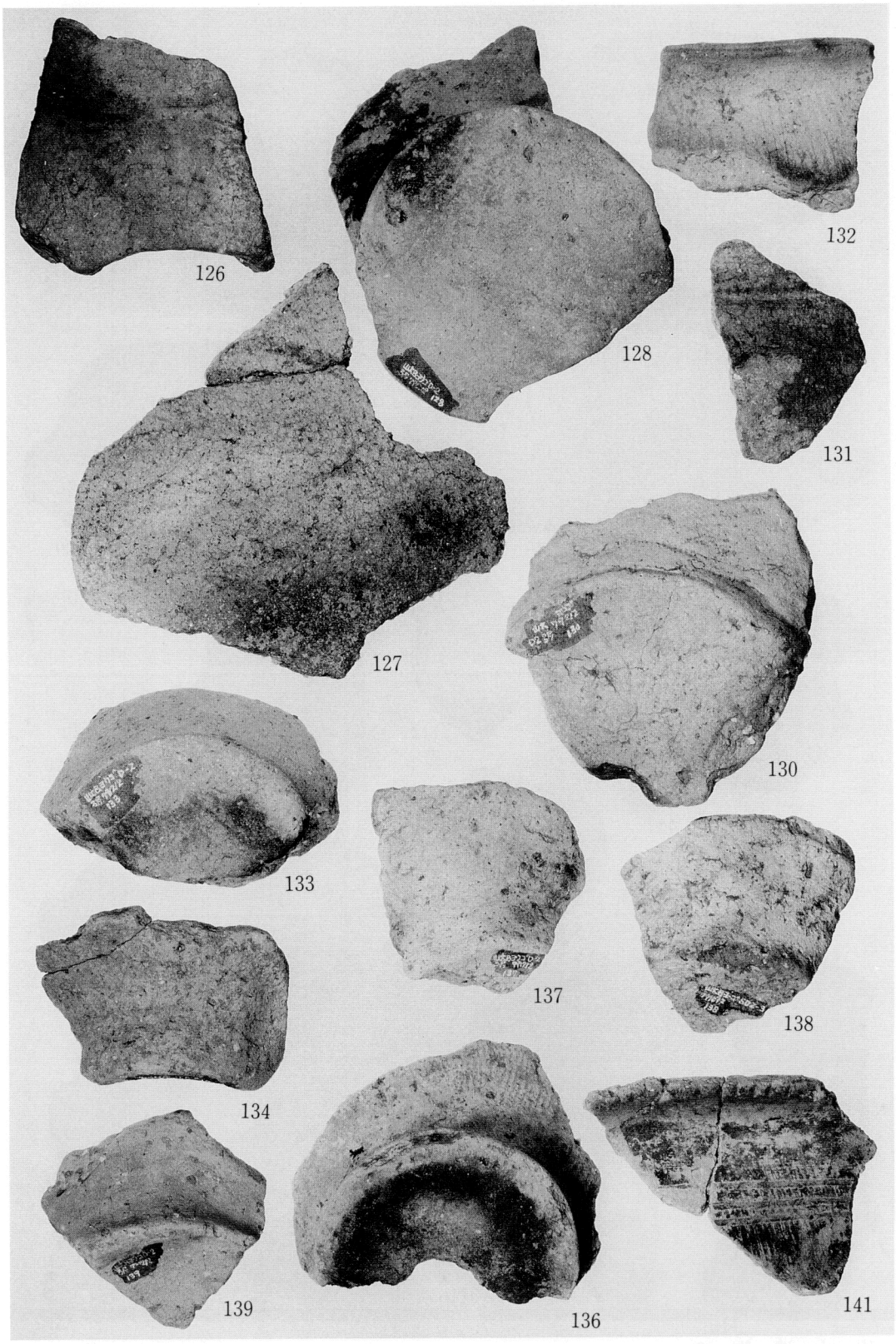
出 土 遺 物 (4)　　約 1：2



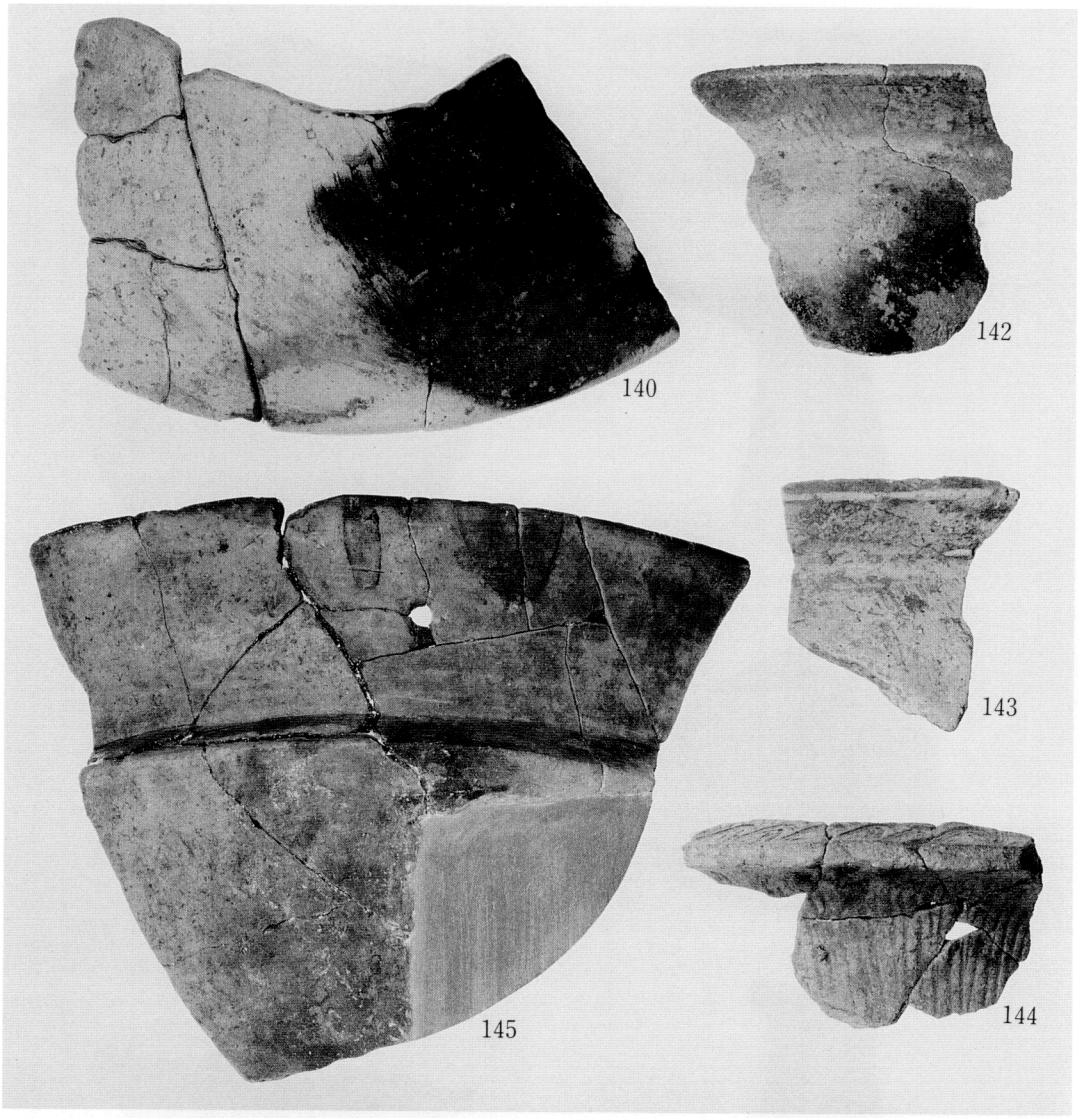
出土遺物 (5)　　約 1：2

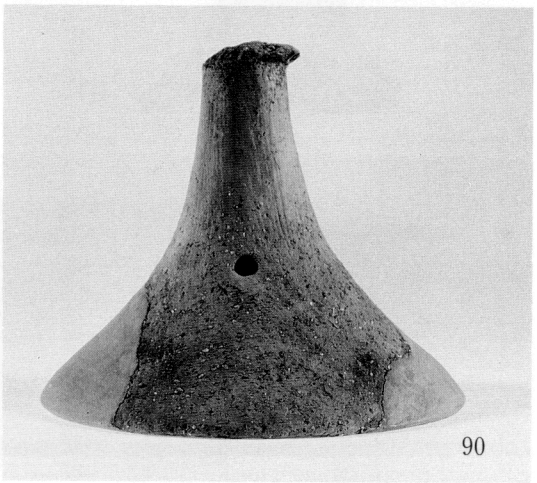

105
106
107
108
109
110
111
112
113
116
118
120
121
122
123
124
125

出 土 遺 物 (6)　　約 1 : 2



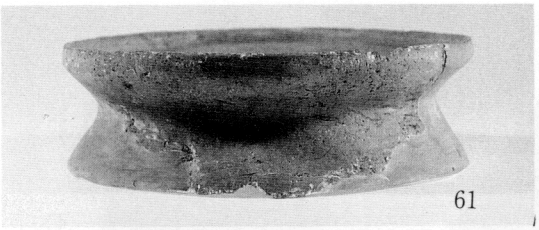
出土遺物 (7)　　約 1：2

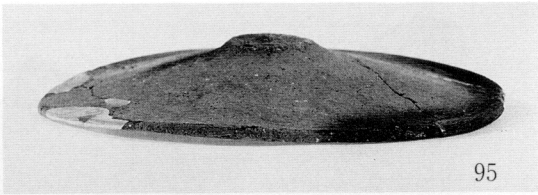


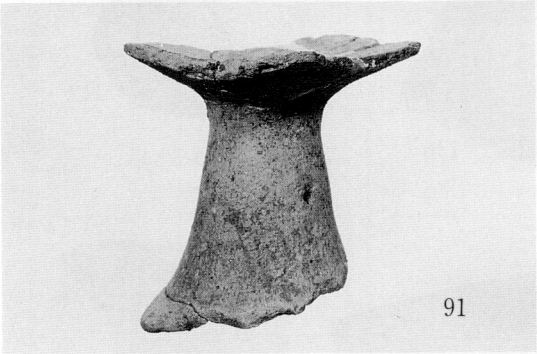


出 土 遺 物 (8)

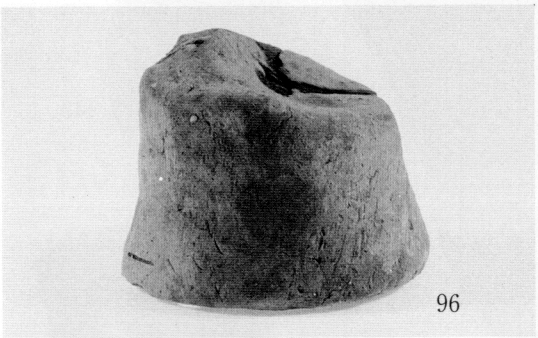
24・90…1：3、その他…約1：2


61

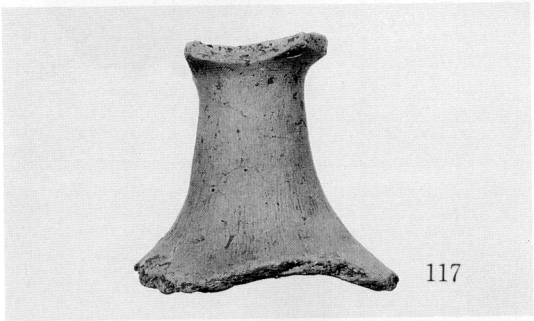

95


91

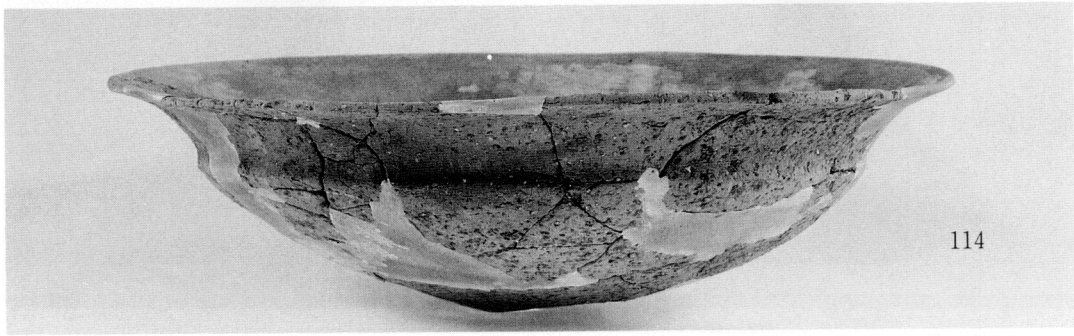
102


96

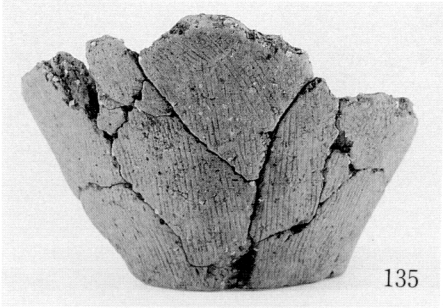
119

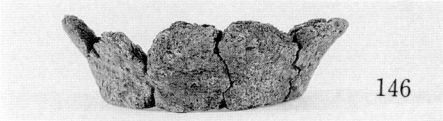

117

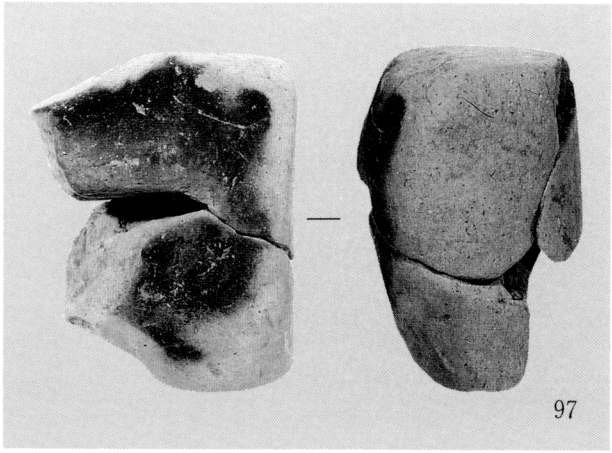
129

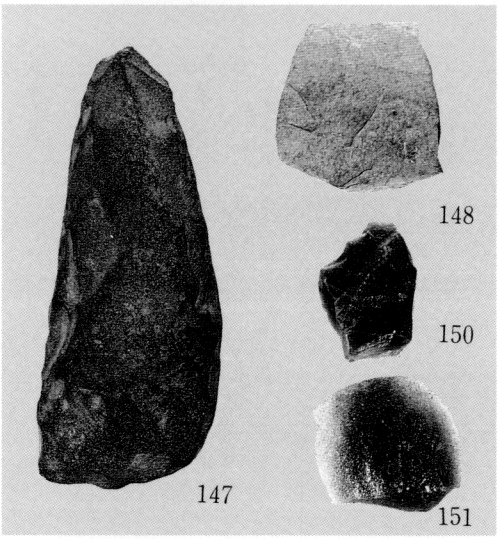

114

出 土 遺 物 (9)　　96・119…約1：2、その他…約1：3









出　土　遺　物 (10)
135・146…約１：３、97・147…約１：２、
その他…約２：３